

横 尾

—高地集落における板敷床を伴う住居址の一例—

1983

長野県南佐久郡川上村教育委員会



横 尾

—高地集落における板敷床を伴う住居址の一例—

1983

長野県南佐久郡川上村教育委員会



H 1号住居址炭化材（西方より）



H 1号住居址床材（南方より）

序 文

横尾遺跡の発見の端緒は、昭和39年冬に川上村林務課職員が山林調査の際、道路から木炭及び土器片を発見したことに始まり当時大深山遺跡調査中の八幡一郎先生にも見ていただきて土師時代の遺跡であることが確実となり、横尾遺跡保存会を作り保存することになりました。

しかし、川上地区県営農地開発事業対象地区に入るため、本遺跡の破壊が予想されるので緊急調査して記録保存することにしました。この遺跡は、山梨県と長野県を結ぶ信州峠の途中に有り川上村に点在する20箇所（確認されたもの）の遺跡の中で最も現住民に近い10世紀中頃から11世紀前半の時代であり、隣県への交通の要所にあたるので興味深いものに思われます。

この調査をしたことによって当時の人達の生活様式などを知り、郷土の歴史を振り返る一助となれば甚だ幸です。

今回の発掘・整理調査にあたり多くの方々の御指導、御協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

川上村教育委員会
教育長 由井 和人

序文

横尾遺跡の報告書が出されることになり、たいへん嬉しく思っています。川上村では、原始時代の有名な遺跡が多く知られています。たとえば馬場平、柏垂、大深山遺跡などです。ところが弥生・古墳時代以降の遺跡になると殆んど知られていませんでした。今度、横尾遺跡の調査によって、その報告書が出されることにより、今迄の空間に対し一点の手掛けを擅むことが出来るものと思い、大きな意義を感じます。

尚此の横尾遺跡の調査に当っては、原区の老人会が発見以来保存会を作つて保護に当り、又、今回の発掘調査にも多くの会員が参加され、炎暑の中で汗まみれの作業に従事し、其外、川上村文化財保護委員会、教育委員会、公民館、また、佐久考古学会のみなさんからは大変な御協力を受けて調査の完了から報告書の作成までに至りました。茲に当時の責任者として思い出を新たにし厚く感謝の意を表し簡単乍ら序文といたします。

前教育長 由井 嘉

例　　言

- 1 本書は、昭和49年7月10日～同年8月10日までにわたって発掘調査された、長野県南佐久郡川上村大字御所平字横尾に所在する横尾遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、東信土地改良事務所が川上村教育委員会を通じて佐久考古学会に依頼し、佐久考古学会会長由井茂也を発掘担当者とし、学会員有志を調査員として地元川上村の人々の協力を得て実施した。
- 3 本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成は、整理担当者が行ない、トレスを島田が主に担当して行なった。なお、遺構実測図の断面及びエレベーション図の水糸レベルは、H1号住居址カマドと集石遺構を除いて統一し、H1号住居址カマド断面図は100cm下げ、集石遺構は90cm上げて実測してある。
- 4 本書に掲載した写真は、林・高村が撮影したものを使用した。
- 5 本書の執筆は、発掘及び整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。
- 6 本書の編集は、高村・白田・林が行ない、由井茂也がこれを校閲、監修した。
- 7 本遺跡の資料は、川上村教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査に際して、当時長野県教育委員会文化課丸山敏一郎、桐原健両指導主事には適切な御指導をいただき、地元の皆様には物心両面にわたる御援助を賜り厚く御礼申し上げます。また、報告書作成にあたっては、下記の諸氏の御指導、御助言を賜わった。記して厚く御礼を申し上げます（尚、敬称は略させていただきます）。

赤羽一郎、井出正義、井上唯雄、桐原健、小林悦雄、小山岳夫、堤隆、原田政信、樋口昇一、福島邦男、前原豊、松島栄治、三石宗一、三石延雄、宮下健司、森泉かよ子、森嶋稔、矢口忠良、由井貞夫、由井港、由井佳幸、綿田弘実（五十音順）

本 文 目 次

巻頭図版

序文・序文・例言・本文目次・付表目次・挿図目次・図版目次

I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 発掘調査日誌	2
III 遺跡の環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
IV 層序について	10
V 発掘調査結果	12
1 H 1号住居址	12
2 D 1号土壤	20
3 集石遺構	23
VI 遺跡周辺の既出資料	23
1 先土器時代	23
2 縄文時代	28
3 平安時代	30
VII まとめ	32
1 佐久地方の焼失住居址について	32
2 主柱穴について	33
3 高地集落	35
4 御所平の流入伝説と地名	46
参考文献	48

付 表 目 次

第1表 川上村遺跡一覧表	8
第2表 H 1号住居址炭化材一覧表	17

第3表	先土器時代の既出石器一覧表	27
第4表	佐久地方の高地遺跡数と割合	37
第5表	高地集落一覧表	39
第6表	山地集落一覧表	39
第7表	佐久地方の灰釉陶器出土遺跡一覧表	41

挿 目 次

第1図	横尾遺跡の地形及び発掘区設定図（1：5,000）	6
第2図	遺跡の位置及び川上村遺跡分布図（1：100,000）	7
第3図	横尾遺跡層序模式図	10
第4図	横尾遺跡遺構全体図（1：200）	11
第5図	H 1 号住居址実測図（1：60）	13
第6図	H 1 号住居址焼土分布図（1：40）	14
第7図	H 1 号住居址炭化材実測図（1：30）	15
第8図	H 1 号住居址カマド実測図（1：30）	18
第9図	H 1 号住居址出土土器実測図（1：2）	19
第10図	D 1 号土壤実測図（1：40）	21
第11図	集石遺構実測図（1：60）	22
第12図	先土器時代の既出石器実測図（1）（2：3）	24
第13図	先土器時代の既出石器実測図（2）（2：3）	25
第14図	先土器時代の既出石器実測図（3）（2：3）	26
第15図	縄文時代の既出資料実測図及び拓影（1：2 石錐のみ1：1）	29
第16図	平安時代の既出土器実測図（1：2）	31
第17図	佐久地方の平安時代住居址規模別分布図	34

図 版 目 次

図版一	遺跡
図版二	炭化材
図版三	炭化材・カマド
図版四	遺構・スナップ・H 1 号住居址出土土器

図版五	遺跡周辺の既出資料
図版六	遺跡周辺の既出資料

I はじめに

1 調査に至る経過

横尾遺跡は、長野県南佐久郡川上村と山梨県北巨摩郡須玉町との県境付近に位置し、両村町を結ぶ信州峠途中に存在する。遺跡は、なだらかな東斜面の山麓台地上にあり、眼下にはパイロット事業により整地された畑地が、山間部とはいえ広々と統いて見晴らしがすばらしくよい。

本遺跡発見の端緒は、昭和39年冬、川上村林務課職員が山林調査の際、道路から木炭及び土器片を見つけ、すぐにこのことを原部落の東原遺跡保存会の人々に連絡したことから始まった。そして同年4月、保存会の人々は、当時大深山遺跡調査中の八幡一郎氏とともにその現場に行き、住居址のカマドと思われる遺構を確認した。このため現場は、土師時代の遺跡であることが確實となり、東原遺跡保存会の人々は、さらに横尾遺跡保存会をつくり現在まで保存してきた。

しかし、昭和49年度川上地区県営農地開発事業対象地区にこの地域がはいっていることにより本遺跡の破壊が予想されるため、川上村教育委員会は事前調査を行なうべく、昭和49年4月26日に県教委文化課指導主事丸山敏一郎氏とともに、佐久考古学会会長由井茂也・同会員由井佳幸・吉沢忠重・村文化財保護委員由井貞夫・由井裕太郎・渡辺佐俊・新海世織・上田貢・由井雅彦・小原雄一郎・東信土地改良事務所川上支所主任佐藤今雄・地元協力者由井満の各氏と、それに村教委井出文徳の14名がその場を調査した。その結果、住居址のカマドであることが再度確認されたため、本遺跡を事前に発掘調査し、記録保存することに決定した。

調査団構成については、川上村教育委員会より佐久考古学会に委託し、団長を会長の由井茂也氏と決め、7月10日より調査を実施する運びとなった。

(事務局)

2 調査の概要

遺跡名	横尾遺跡
所在地	長野県南佐久郡川上村大字御所平字横尾
調査期間	昭和49年7月10日～同年8月10日
検出遺構	平安時代住居址1棟、土壙1基、集石遺構1基
出土遺物	土師器、灰釉陶器

調査に関する事務局

- 発掘調査　由井嘉（川上村教育委員会教育長）井出文徳（同社会教育係主事）高見沢芽実（同学校教育係）
- 整理調査　由井和人（同教育長）山中年行（同社会教育係長）山中重徳（同公民館長）

調査団の構成

- 発掘調査 (団長) 由井茂也 (調査員) 藤沢平治、由井佳幸、吉沢忠重、林幸彦、白田武正、高村博文、花岡弘、村山好文、小林秀人 (協力者) 新海世織、由井正衛、由井港、林勝、由井貞夫、井出静雄、渡辺佐俊、佐野豊、上田貴、小林正輝、渡辺恒雄、新海ゆきこ、篠原みつえ、岩水勝次、井出昇、渡辺菊雄、市川和宇、川上村中学校社会科クラブ。
- 整理調査 (団長) 由井茂也 (調査員) 高村博文、林幸彦、白田武正、花岡弘、島田恵子

III 発掘調査日誌

7月10日 (水) <曇りのち雨>

現場は、ツツジの木、ワラビ、ゼンマイなどの草木がうっとうと茂っており、人力ではとても歯がたちそうにない。そこで重機の力を借り、約2時間表土削平を行ない、南北に36m、東西に22mのおよそ792m²をきれいに削平する。この際、削平面において、焼土らしきものが1カ所露出する。削平された地域に2m間隔の基準杭を南北に19本、東西に12本打ち込み、グリッド設定を開始する。

7月13日 (土) <曇り>

先日、打ち込んだ十字の基準杭をもとにして2m四方のグリッドを東西にA～Kの11行、南北に1～18の18列、合計198グリッドを設定する。発掘地域の地層状態を把握するため、基準杭に沿ってD～K-8、F-1～17の24グリッド内に1m幅のトレンチを入れ、ローム層直上まで掘り下げる。その結果、削平面からローム層直上までは約30cm程であることがわかる。

本日、頭を重機につぶされ死んでいる大きなマムシを発見。地元のおじさん達の話によると、この付近は、マムシのすみかとのこと、十分御用心を！

7月14日 (日) <曇りのち雨>

遺構を検出するため、1つおきにA・C・E-3、C・E-5、E-7の6グリッドを掘り下げる。しかし、遺構らしきものの存在は確認できない。併行して本遺跡発見の端をなしたカマドを有する住居址の検出に着手し、C・D・E-13・14グリッドを掘り下げ始める。午後、雨のため中止する。昨日、見つかったマムシのだんごをみんなで食べたが、とてもおいしかった。

7月15日 (月) <曇りのち雨>

昨日と同様、遺構検出のため新たにA-5・7・9グリッドを掘り下げる。しかし、遺構らしきものは検出されない。また、カマドにともなう住居址のプラン確認も継続し、新たにC-15・16、D-15グリッドを拡張する。その結果、C・D-15グリッド内に住居址と思われる黒色の落

ち込みが確認され、H1号住居址とする。午後、雨のため中止にする。

7月22日（月）〈快晴のち曇り〉

15日と同様、遺構検出のため1つおきにC-9、D-11グリッドをあけてみる。しかし、遺構と思われる落ち込みは検出されない。また、H1号住居址の平面プランを検出のため、C-14・15、D・E・F-14・15・16グリッドを拡張した結果、C・D-15・16グリッド内に土壌と思われる落ち込みが検出され、D1号土壌とする。

H1号住居址の落ち込みの上面を精査した結果、南半分は、道路により擾乱されていることがわかる。次に、覆土の堆積状態と床面を把握するために14列グリッドに沿って、15列グリッド内に幅30cmのトレンチを入れ掘り下げてみる。その結果、床面に達する前に焼土及び炭化材が多量に存在する面があったため、その上面で掘り下げるのを中止する。

7月23日（火）〈快晴のち曇り〉

初日の表土削平を行なった際、露出した焼土の性格を追求するため、B・C-6・7・8、D-7・8グリッドを掘り下げた所、平面プランがほぼ方形となる板状の礫が多量に存在することがわかる。このため、板状の礫が分布する範囲を集石遺構とする。

H1号住居址については、昨日入れたトレンチの断面をきれいにカッティングし、土層を観察する。そして全プランの1/4である北東部を層位ごとに掘り下げ始めた所、壁沿いに炭化材が良好な保存状態で存在し、また、各所に同様な炭化材が検出される。

D1号土壌については、プラン検出のためさらにC・D-16グリッドを拡張し、全プランを検出した結果、長軸方向が北東のほぼ小判状の形をなすことがわかる。そこでプラン内に長軸を軸とした十字の水糸を張り、4つのブロックに分割し、東部ブロックと西部ブロックの掘り下げを開始する。

7月24日（水）〈曇りのち雨〉

昨日検出された炭化材の追求を西側部分にまで押しひろげてみる。その結果、西側にも東側と同様、良好な状態で炭化材が存在することがわかる。そこで、全プランの北側部分全域にわたって焼土及び炭化材の検出を行なう。カマドは擾乱を受けているものの西南隅に存在することも確認する。D1号土壌については、昨日の作業を継続し、2ブロックとも底面まで検出する。午後は、雨のため中止する。

7月25日（木）〈曇り時々小雨〉

A-8・9、E-9グリッドをローム層直上まで掘り下げてみたが、遺構らしきものは検出されない。H1号住居址内の焼土及び炭化材の検出を全プラン内（道路による擾乱部分を除く）まで押しひろげる。その結果、ほぼ全面に焼土及び炭化材の存在することがわかる。

D1号土壌については、十字の断面をきれいにカッティングし、土層断面図及び写真をとる。

次に、残りの2ブロックを掘り下げる、底面まで掘り終える。底面の2つのピットを検出する。

7月26日（金） 〈晴れ〉

H1号住居址内の焼土検出を継続し、また、床面までの覆土土層断面を実測する。D1号土壤については、ピットを掘りあげ、周辺及び内部の清掃を行ない、実測と写真撮影を行なう。D1号土壤での全作業は、本日で終了する。

7月27日（土） 〈晴れ〉

H1号住居址の焼土をきれいに検出し、水糸でプランを50cm四方の方眼に区切り、焼土及びこの段階で検出されている炭化材の実測を始める。

8月2日（金） 〈晴れ〉 集石遺構の検出、清掃を行ない実測する。

8月3日（土） 〈晴れ〉

H1号住居址の焼土の実測を終え、これを取り除く作業を開始する。

8月4日（日） 〈晴れ時々雷雨〉

H1号住居址の焼土を取り除く作業を終了し、炭化材をすべて検出する。炭化材に番号を付けて、水糸方眼による実測を開始する。

本日、3時頃から豪雨が降る。およそ30分ぐらい降り続く。止んだあと、ゴーと音がして変だと思い、外に出て見ると、泥水がヘビのようにどっと道路に沿ってH1号住居址めがけてつっこんで来るではないか。あっ！これはいけないと思ったがどうしようもない。しかし、よく見るとそれは、団長さんがつくった溝に流れ込み、H1号住居址に入らずにすんだのである。何としばらくしい溝だろうと思、昨日は、団長さんが何のために溝を掘っているのか疑問に思ったが、今日になって初めてその溝の利用価値がわかった。ほんとうに、この溝がなかったら、また、同じ作業を幾日もかけなければならなかつたであろう。団長さんの素晴らしい機転により教われたのであった。

8月5日（月）～8月7日（水） 〈晴れ一時雷雨、晴れ、うす曇り〉

H1号住居址の炭化材の実測を継続し、東西、南北の炭化材をいたるエレベーションをとる。

8月8日（木） 〈晴れ〉

H1号住居址の炭化材の実測を継続する。集石遺構の東西、南北の断面図をとり、本日でこの遺構の全作業を終了する。

8月9日（金） 〈晴れ〉 H1号住居址の炭化材の実測を終える。

8月10日（土） 〈晴れ〉

H1号住居址の典型的な炭化材をセッコウで取り上げ、清掃を行ない写真をとる。カマドの切開をして実測し、本日でH1号住居址の全作業を終了する。

遺跡の全景、遠景の写真をとり、本遺跡の発掘作業は、すべて完了する。

（高村博文）

III 遺跡の環境

1 地理的環境

横尾遺跡は、かつて想像もできなかった山中に、人煙を隔て、存在した遺跡である。しかし、其所は、広々とした平原を囲む山麓であり、ゆるい流れの河川に着き溯って峠を越し、再び清流に沿って下れる、極めて自然な、しかもそれが、甲信国境を結ぶ重要な道路に近接している。道路は、小尾道と呼び、峠も小尾峠と呼んだが、今では信州峠である。

遺跡の所在は、川上村大字御所平字横尾地籍であり、横尾山（1818m）を発する尾根の末端付近であるが、現状は、大字原区の野菜団地として開発され、山を崩し、谷を埋め、地形は変貌し往時の景観をとどめない。

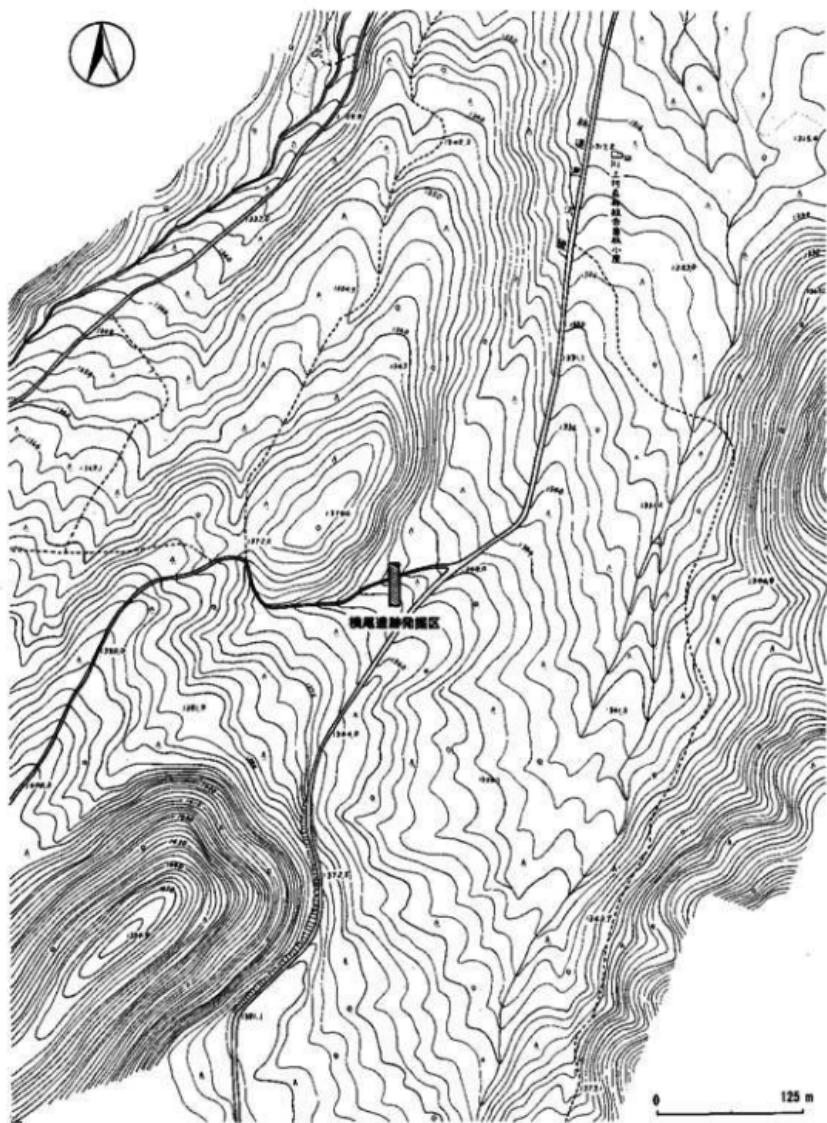
遺跡から峠までは、なだらかな上り道で、凡そ2km位である。地形は、総体に東向きの緩斜面で、日当たりはよいが、1300mを越える標高で冬は積雪、平素風雨の強い場所である。水汲みは、150m下の川まで降りなければならなかった。

横尾山は、天然唐松、楊、黒檜、ミズナラ、八重皮カンバ、ハンノキ、シラカバなどの雜木の自然林に覆われていた。低地には、サワラ、モミ、楊、シオジ、ニレ、モミジ等の老木も繁茂していた。古くより村人に利用された木材としては、桶子材として勝れた黒檜、サワラが知られ、その外は、下駄材や薪炭材が主であった。また、狩猟場としては、これから深山にはいり、熊や鹿の棲息地であり、川魚は浅い谷川にまで棲息している。

遺跡の下方を横切る小尾道は、その昔、沢の向う側の山裾を小尾峠に向かって通ったといわれており、そこに古道という地名も残っている。古道は、遺跡から一望のうちで、今はまた、広袤たる野菜団地が、高登谷山（1846m）や小川山（2418m）の山麓まで続き、北方には、川上村の盆地の向うに男山（1851m）や天狗山（1882m）が聳えて見える。また、近年、長野県企業局が開発した高登谷別荘分譲地が、野菜団地よりもまだ高所を選んで存在している。

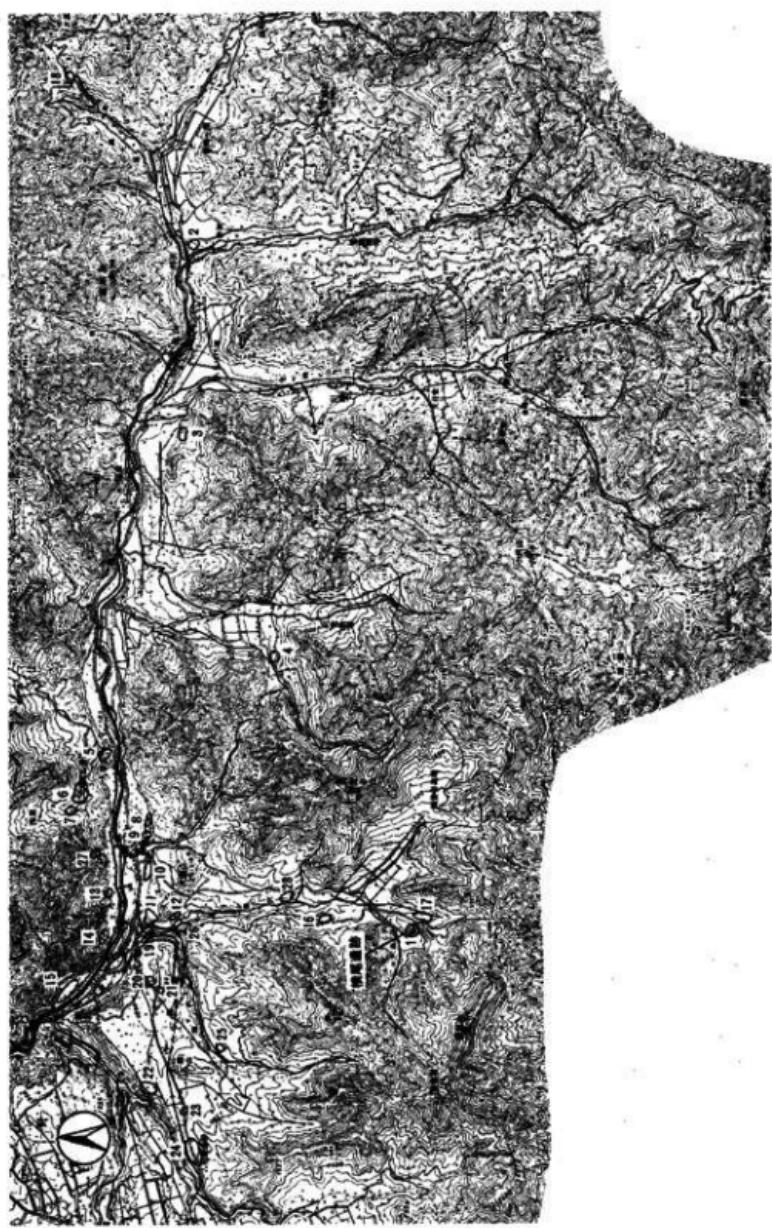
2 歴史的環境

川上村内の遺跡は、28ヶ所知られており、先土器時代では、研究史上極めて重要な位置を占める柏垂（24）、馬場平（10）を初め11遺跡あり、縄文時代としては、早期の東原（7）を初めとして、国の史跡に指定され、縄文時代中期の大集落址である大深山（6）を含め16遺跡ある。弥生時代の遺跡は、現在、その存在は知られていない。さらにそれに続く古墳、奈良時代の遺跡も確認されていない。しかし、平安時代になって遺跡が存在し、横尾（1）を含めて10遺跡知られている。



第1図 横尾道跡の地形及び発掘区設定図 (1 : 5,000)

第2図 遺跡の位置及び川上村道路分布図(1:100,000)



第1表 川上村遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
1	横尾	御所平横尾	山腹	本調査遺跡	
2	上の段	桜山上の段	段丘	(先)ナイフ形石器、尖頭器、黒曜石片、原石	
3	しだみじゅく	居舎しだみじゅく	台地	(平)須恵器	
4	小川原	* 小川原	平原	(縄)上原式、勝板式	
5	上の段	大深山上の段	山腹台地	(縄)勝板式、加曾利E式、縄ノ内式、加曾利B式、石鏡、打石斧、磨石、磨石斧 (平)土師器、須恵器	(歳)大深山考古館
6	大深山	* 西原	*	(縄)中期堅穴住居51、積石塁構、勝板式、加曾利E式、石鏡、石鏡、打石斧、石皿、磨石斧、土偶、土製耳飾、クルミ (昭28、35、36、38、39年発掘)	史跡 (歳)大深山考古館
7	東原	原 東原	*	(縄)中期伊址、押奈文土器、撲糸紋土器、加曾利E式、石鏡、スクレイバー、刮片石器 (昭38、39年発掘)	(歳)大深山考古館
8	水の元	* 水の元	台地	(縄)土鏡、石鏡、打石斧、石盤 (平)土師器	
9	寒い沢	* 寒い沢	平地	(縄)加曾利E式	
10	菅の平	* 菅の平	台地	(先)ナイフ形石器、尖頭器、彫器、スクレイバー、小形石器 (縄)石鏡	
11	馬場平	御所平馬場平	*	(先)尖頭器、彫器、スクレイバー (昭28年発掘)	(歳)明治大学
12	霞の尻	* 霞の尻	*	(先)尖頭器、スクレイバー	
13	御堂窪	* 御堂窪	山腹台地	(縄)轟磧b-c式、圓場式、五鏡ヶ台式、石鏡、石鏡、石鏡	
14	大海堂	* 大海堂	台地	(平)土師器	
15	深山口	* 深山口	段丘	(縄)轟磧b式、勝板式、加曾利E式、縄ノ内式、加曾利B式、石鏡、打石斧、磨石斧、石鏡、石棒、土偶、耳鉤、疣状耳飾	(歳)由井晴、由井貴夫、山井茂也
16	兵部	* 兵部	台地	(縄)土器、石鏡、打石斧 (平)土師器	
17	赤土平	原 赤土平	山腹平原	(先)尖頭器、スクレイバー、彫器 (縄)轟磧b式、石鏡	
18	二木本	桜山二木本	山腹	(縄)押型文土器、石鏡、石盤、黒曜石、チャート刮片	
19	天神林	御所平天神林	台地	(縄)土器、石皿、石盤	
20	七久保	* 七久保	*	(縄)勝板式、打石斧 (平)土師器	
21	唐沢	* 唐沢	*	(先)尖頭器 (縄)勝板式、加曾利E式、石鏡、打石斧、石鏡	

22	切 草	御所平切草	古地	(先)尖頭器、彫器、スクレイパー (平)土師器(羽釜)、灰陶陶器	(癡)由井茂也
23	西 の 墓	* 西の墓	*	(先)尖頭器	
24	柏 重	* 柏 重	*	(先)ナイフ形石器、尖頭器、彫器、スクレイパー、 圓筒形石器、石核、石刃、台石、磨石、敲石、 制片(昭47年発掘)	(癡)川上村教委 由井茂也、由井 明、由井和明
25	馬 飼 場	* 馬 飼 場	*	(平)土師器、灰陶陶器	
26	三 屋 畦	* 三屋 畦	*	(癡)山形押型文土器、下島式、轔坂式、石盤	
27	穴 汽	御所平穴汽	古地	(先)制片	
28	青 木 平	原 青 木 平	山麓 原	(先)尖頭器 (平)土師器	

遺跡の分布は、現在、川上村の中心である御所平・原・大深山部落付近の千曲川両岸に密集しており、秋山、桜山方面では3遺跡が知られているだけである。横尾遺跡の存在する黒沢川(高登谷山や横尾山山麓から流れ出す幾すじもの細流を基めて黒沢川となり、北流して千曲川に合する)上流地域には、先土器、縄文時代の遺跡である赤土平(17)、縄文、平安時代の遺跡である兵部(16)と、先土器、平安時代の遺跡である青木平(28)の3遺跡がみられる。下流には先土器時代の大遺跡である馬場平があり、横尾との距離は約4km位である。

横尾遺跡では、小尾道を中心にして今回の開発工事で、幾ヶ所の先土器時代の遺物が発見されたが、それらは工事で破壊された後からの表採であった。また高登谷山麓は、此の地帯唯一の、南面山麓で湧水も豊富で注目すべきであったが、調査の機会もなく開発されてしまった。本遺跡付近での先土器時代の遺物については、VI章でふれるが、石器の中に水晶の製品があった。水晶の原石は、小川山や瑞牆山(2230m)に産出するといわれている。原始人達もこの雄大な山嶽や渓谷を、狩猟や石材の採取に跋涉していたのだろうか。

歴史時代の記録や伝説が、甲斐側に多く、信州側に皆無というのは、如何なる理由によるものだろうか。甲斐国誌や須玉町誌に依れば、古代御牧として知られる柏前の牧、穂坂の牧が、甲信国境を越えて相接し、小尾道は別に穂坂路と呼ばれ、峠は川上口といわれていたという。また、小尾道に隣接する旧小尾の村落(御門、神戸、東小尾、和田、黒森)の総社、神部神社は由緒によると8世紀初頭の創建であり、式内社である。

口碑伝説によれば、小尾は、小尾府と称し非常に繁栄し11・12世紀頃、信州川上から常に強盗が、この小尾府に乱入し万民を苦しめたという。そこで新羅三郎義光が大勢の軍兵を率いて北敵の退治に出陣し、道中で薬師如来の加護を受け強盗を退散させ、薬師平の薬師堂は、新羅三郎の建立だと伝えられている。

鎌倉・戦国時代を通じて、更に甲信、関東の土豪や武将の隠密、將兵の通路として重要性を増し、川上口を上州や武州への連絡路とした。天正壬午(1582)の北条軍、甲斐侵攻には、希兵隊

がこの峠を通過し、獅子吼城によって若神子の本陣に対し右翼をなしたとも伝わっている。神部神社は武田氏や徳川氏の幕崇を受け、神前の道路は人通りが絶えなかったという。また、ある時は、山伏や修験者の通路でもあったであろう。峠の頂上からは、横尾山、飯盛山を経て平沢に通じ、三沢を経れば野辺山に通ずるという要路でもあった。峠下の黒森には、国界番所、または、口当番所といわれるものがおかれていたと伝えられている。

江戸の末期から明治・大正時代、この地帯は伝統的な馬産地として知られ、甲州では小尾、津金藏原、川上で御所平の觀音が栄え、講を立てての参詣者で賑った。また、明治になってから一時期、秋山、梓山から移出された木材が、小荷駄馬によってこの峠を運搬されたともいわれるけれど、平沢や野辺山の道路が整備されるようになって以来、この小尾道は、さびれてゆく一方であった。

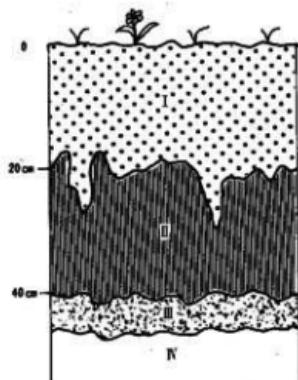
しかし、ここでも歴史はくり返されるのか、さまざまな産業開発が進んで、かつての人々が長い時代わらじで踏み固めた道が、立派な舗装道路に代って、再び山業とか登山、ハイキング等多彩な賑いを見せるようになってきた。

(由井茂也)

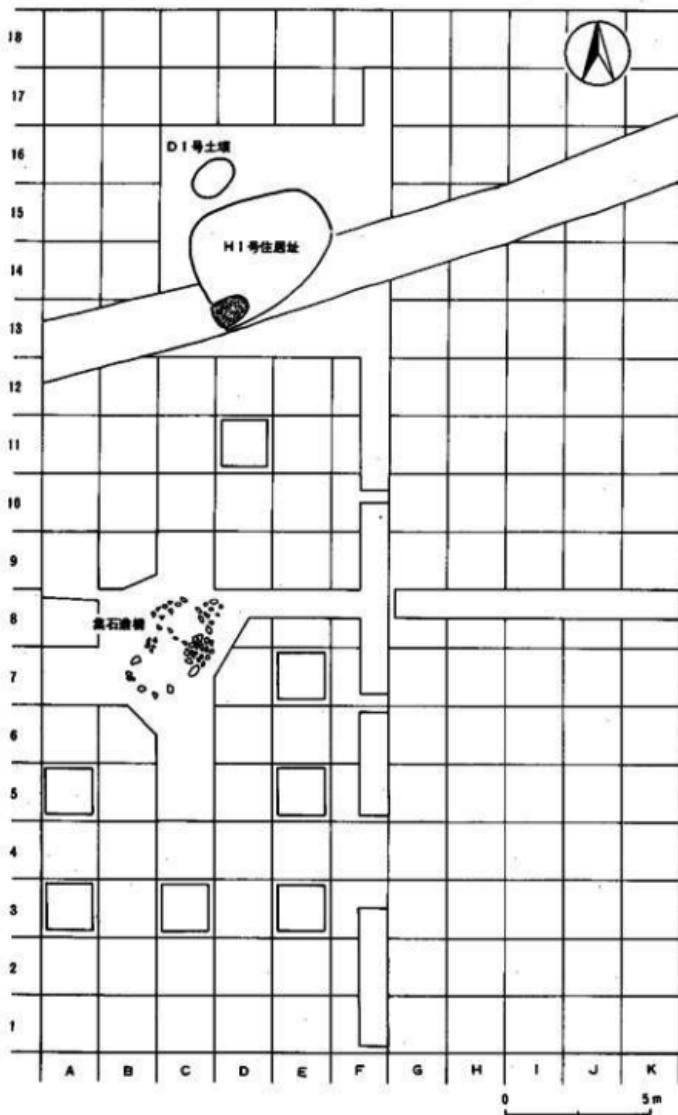
IV 層序について

- I層 漆黒色土層。いわゆる表土で地上にはえている木や草の根により擾乱を受けている。土質は有機質土で多少粘性もあり、約20~30cmの層厚を有している。この層は、調査の前段階において、重機により削平を行なった。
- II層 黒褐色土層。やや粘性のある有機質土であり、約20~30cmの層厚を示している。この層は、I層の下に続き、遺跡の全般に見られる層で、集石遺構は、この層の上部頃に存在する。F列に入れた発掘地区地層確認トレンチ内での観察では、F-15グリッド内の道路の擾乱を境に、南側にはII層からIV層へ移行する漸移層が、そして北側にはIII層が続く層位をなすことが見られる。
- III層 黒色土層。この層は、前述したように発掘地区的北側に見られる層で、H1号住居址とD1号土壤の上位覆土でもある。
- IV層 黄色土層。黄色粘質ローム層ともいえる層である。

(高村博文)



第3図 横尾遺跡層序模式図



第4図 横尾遺跡遺構全体図 (1 : 200)

V 発掘調査結果

1 H1号住居址

遺構(第5~8図、巻頭図版、図版二~四)

本住居址は、I章1調査に至る経過でも述べたように、本遺跡の発見の端緒となったカマドを伴う住居址で、調査区北部のC・D・E-13・14・15グリッドに位置し、全体層序IV層上面において検出された。北壁の北側外にD1号土壤が存在し、南側部分は道路により破壊されていた。

平面プランは、東西495cm、南北は道路により破壊されていてはっきりしないが、東西と同様と思われ、隅丸方形を呈す。カマドを中心とする主軸方位はN-104°-Wを指している。

覆土は、第5図土層断面図A-A'に示されるように、第1~7層に区分される。第1層は、全体層序III層と同様であるが、ローム粒子が混入している。第2・3層は、黒色土と黒褐色土のちがいがあるが、共に炭化物、焼土粒子とローム粒子を含んでいる。第4・5層は、ロームブロックとローム粒子を含むちがいがあるが、共に黄褐色土層で焼土と炭化物を含んでいる。この4・5層は、炭火材の存在する層で、焼土が濃密に炭化材の上面に沿って存在することが、観察される。第6層は、炭化材の下層で漆黒色土層にロームブロックが混入しており、焼土及び炭化物の混入はあまり見られない。第7層は、B・B'の覆土で黄褐色を呈し、黒色ブロック、ロームブロック、焼土ブロック、炭化物多量と小砾が少々混入していた。

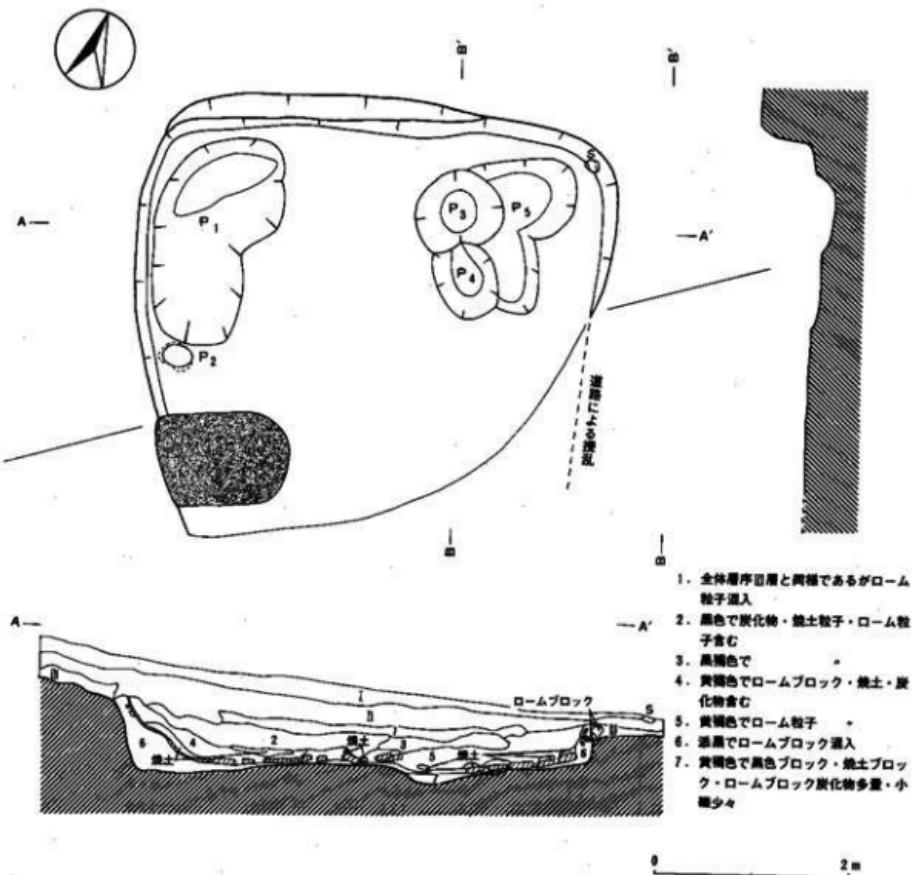
確認面からの壁高は、山側の西壁が高く約70cm、その反対の沢側の東壁は低く約20cmを測り、急傾斜をもって立ち上がるが、但し、北壁は北東隅付近を除き壁の中位頃からなだらかな立ち上がりを見せており、床面は、IV層黄色粘質ローム層を掘り込んで構築されており、ピット付近以外は概ね平坦である。床面の状態は、全体にかたく床材の下部はやや軟弱であった。

ピットは総計5個確認されている。すべて床面内であり、外側からは検出されていない。B・B'・Rは、深さが3~10cmで浅く、非常になだらかな立ち上がりをもつ掘り込みで、Rの上部には炭化材が敷いてあった。Pは、長径30、短径20cmの楕円形で深さは約20cmあり、袋状のピットである。Bは、直径約90cmのほぼ円形を呈し、深さは約20cmを測り、なだらかな立ち上がりをもつ掘り込みである。B・B'の南側から炭化材が散かれていた。B・B'は、その規模、位置から柱穴のように考えられるが、Bは上部の炭化材の関係、B'は覆土の状態から柱穴としての積極的な所見は得られなかった。B・B'の覆土は、住居址覆土第7層に示されているように、焼土、炭化物の混入が見られ、その上位の第6層中にはこれらの混入はあまり見られなかったことから、本住居址が焼失した際の焼土及び炭化物と異なるものと考えられる。また、貼床は、見られなかっ

たもののPの上部には炭化材が散かれており、このことからPは床下土壤と考えられる。あるいはP・P'もそうではないかと推測する。

カマドは、西壁の南隅寄りに位置するものと思われ、ほとんど山石を用材として90×190 cmの範囲に構築されている石組カマドである。火床部の焼土は、かなり堆積しており、一概にいえないうが、長期にわたる使用が考えられる。

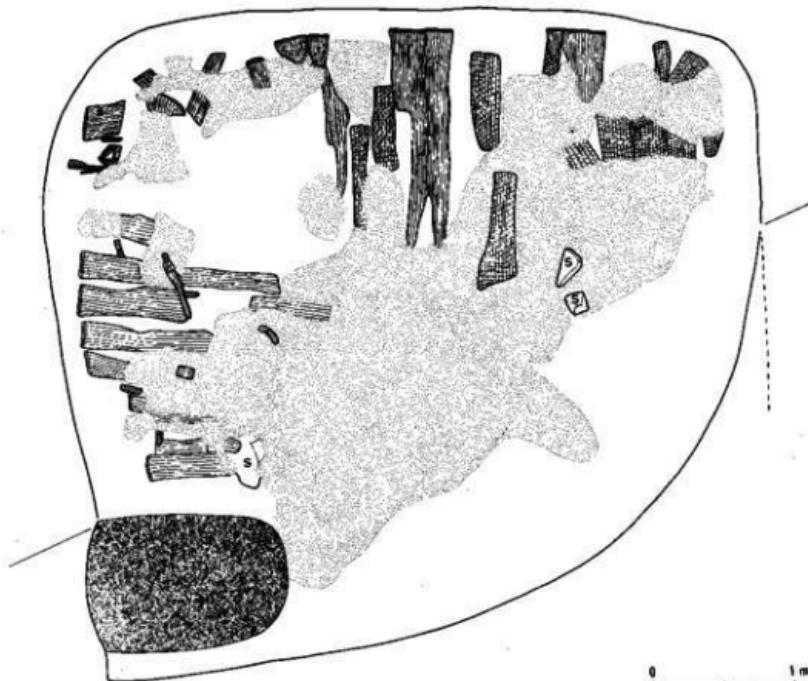
本住居址は、火に遭っており焼土、炭化材が多量に検出された。焼土のほとんどは、第3・4



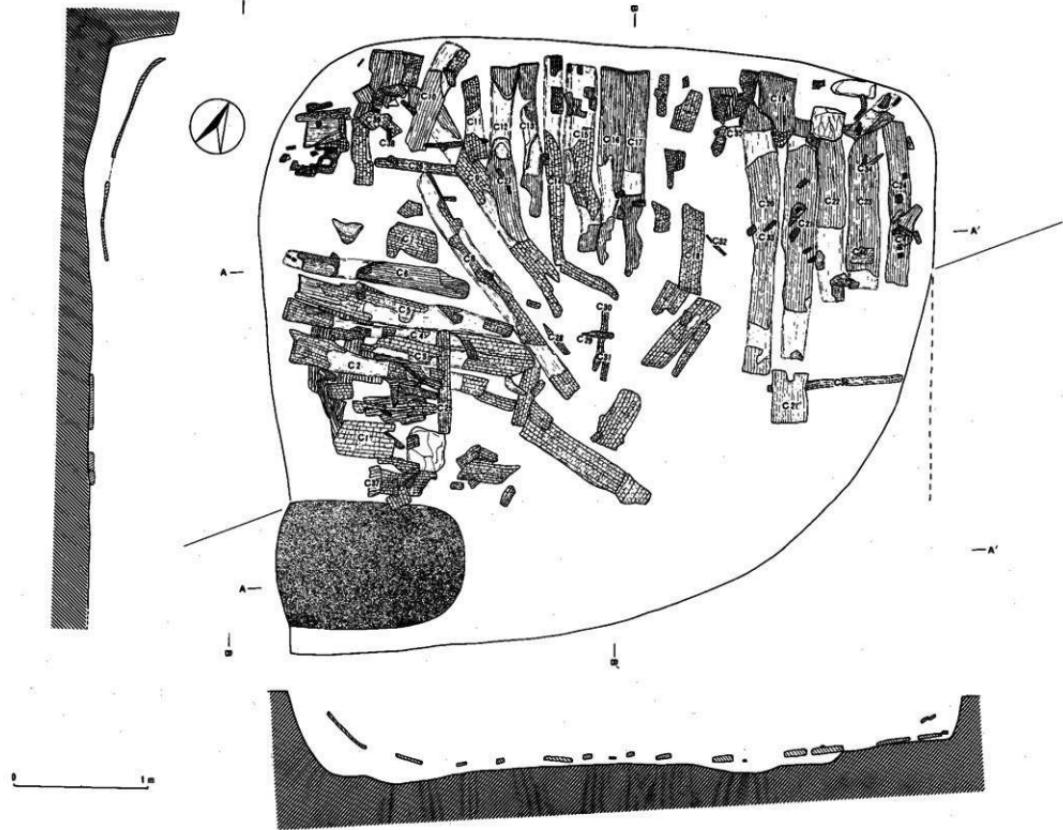
第5図 H1号住居址実測図 (1:60)

層中にある、第6図に示したように住居址全般にわたり分布している。特に壁際付近の炭化材の上にのっている焼土は濃く、住居址中央付近は薄く分布している。これらの焼土の存在は、火が
出たあと土をかけて消そうとしたものとも考えられるが、その分布が広範にわたっていることや
⁽¹⁾多量に存在することから屋根材の上にのせた粘土が焼けたものと考えられる。

炭化材は、床材、根太材などを除き第6層の上面に存在し、床面より多少浮いた状態で検出されている。また、それらのうち壁際付近の板状の炭化材は、C_oのように壁の上部頃からゆるやかに弯曲して、住居址の中央に向かって落ち込んでいるものが多く、焼失した後、土圧により変形したものと考えられる。検出された炭化材151材のうち棒状と思われるものは26材、木皮が5ヶ所で、⁽²⁾あとのほとんどが板材である。その他にカヤ状炭化物が8ヶ所で確認されている。炭化材の材質は、团长と由井佳幸氏の所見によれば、幅の広い、長尺のもので、しかも、豊富な木材の



第6図 H1号住居址焼土分布図 (1:40)



第7图 H1号住宅址炭化材实测图 (1:30)

第2表 H 1号住居址炭化材一覧表

炭化材番号	最 大 幅(cm)	厚 さ (cm)	最 大 長 度(cm)	備 考
C ₁	26	2	50	板材と思われる。表面は板目。下に焼土あり。
C ₂	26	5	157	角材？ 表面は板目。
C ₃	15	3	130	板材と思われる。表面は板目。下に焼土あり。
C ₄	13	5	200	角材？ 表面は板目。裏側局部的に焼けでない。
C ₅	23	4	175	板材と思われる。表面は板目。裏側部分的に焼けでない所あり。裏側も焼けている。割てある。
C ₆	18	5	156	角材？ 表面は板目。裏側部分的に焼けでない所あり。裏側も焼けている。
C ₇	25	2.5	36	板材と思われる。表面は板目。裏側部分的に焼けでない所あり。裏側も焼けている。下に焼土あり。
C ₈	14	4	200	板材？ 表面は板目。裏側は焼けでない。
C ₉	18	2	180	板材と思われる。表面は板目。裏側は部分的に焼けでない。
C ₁₀	20	3	94	板材と思われる。表面は板目。裏側も焼けている。
C ₁₁	13	4	65	板材？ 表面は板目。裏側も焼けている。下に焼土あり。
C ₁₂	20	5	147	角材？ 表面は板目。裏側も焼けている。
C ₁₃	11	2.5	127	板材と思われる。表面は板目。裏側も焼けている。
C ₁₄	14	2	212	板材と思われる。表面は板目。
C ₁₅	18	2	142	板材と思われる。表面は板目。裏側局部的に焼けでない。
C ₁₆	16	1.5	154	板材と思われる。表面は板目。裏側も焼けている。
C ₁₇	17	2	166	#
C ₁₈	14	2	50	#
C ₁₉	27	3	70	板材と思われる。表面は板目。
C ₂₀	27	4	216	板材。床材と思われる。表面は板目。裏側焼けでない。
C ₂₁	23	4	151	#
C ₂₂	23	?	39	道路下のため圧力により変形している。C ₂₁ の続きと思われる。
C ₂₃	20	2	124	板材。床材と思われる。表面は板目。裏側焼けでない。
C ₂₄	24	2.5	130	#
C ₂₅	20	3	120	#
C ₂₆	10	2	76	板材？ 表面は板目。
C ₂₇	8	1.5	86	板材？ 表面は板目。裏側焼けでない。
C ₂₈	3	0.5	25	棒状？ 板目。
C ₂₉	5	2	30	#
C ₃₀	6	1	23	棒状？ 板目。C ₃₀ の上に乗っている。
C ₃₁	6	1	41	棒状？ 板目。
C ₃₂	5	2	16	棒状？ 板目。
C ₃₃	3	1	20	棒状？ 板目。表面についている。
C ₃₄	1	4	10	棒状？ 板目。

C ₂₄	--	直径3	30	棒状。
C ₂₅	8	1	110	根太材と思われる。裏側焼けていない。
C ₂₆	--	直径8?	100	根太材と思われる。(丸材?)裏側焼けていない。 道路下のため圧力により変形している。
C ₂₇	17	0.5	8	木皮。下に地土あり
C ₂₈	3	0.5	8	木皮。
C ₂₉	15	0.2~0.3	35	#
C ₃₀	3	0.5	5	#
C ₃₁	21	0.5	28	#

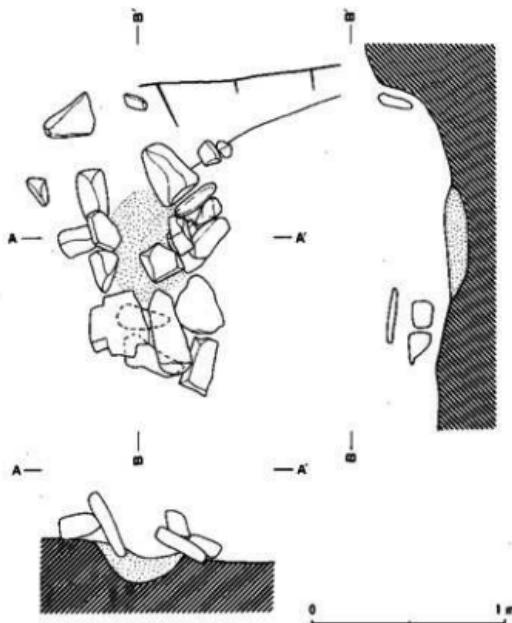
使用に驚き、素性のよく割れてい

る材質から見てサクラ又はネズコ
ではないかとのことである。また
木皮についても、杉の皮と同じよ
うに屋根板替りに使われ、耐久力
もあるとのことである。さらに付
近の山にたくさんあり、加工しや
すい材でもあるという。

板材と思われるものの代表的な
例はC₁~C₁₁で、厚さ5cmのものは
角材かもしれない。これらのうち
C₁~C₁₁の炭化材は、床面直上で裏
側は焼けでない、その両端の下
から直交する形で根太材と思われ
るC₁~C₁₁が検出されていることか
ら、床材と考えられる。C₁~C₁₁の
板材は、幅11~27cmで長さも最大
のものは212cmもあり、C₁~C₁₁を
除き壁に沿って規則正しく並んで
おり、また、壁に直交する形で壁側
から住居址の中央に向かって落ち込んでいる。

C₁~C₁₁は、棒状の材と思われるが、根太材と考えられるC₁~C₁₁以外は長さ41cm以内の細い炭化
材しか検出されていない、柱材と考えられる材は確認されない。

柱材は、あるいは角材であったかもしれないが、角材と思われる炭化材についても、柱材と観
察される材は見あたらず、どのような上屋構造をしていったものか、今後の研究課題としたい。



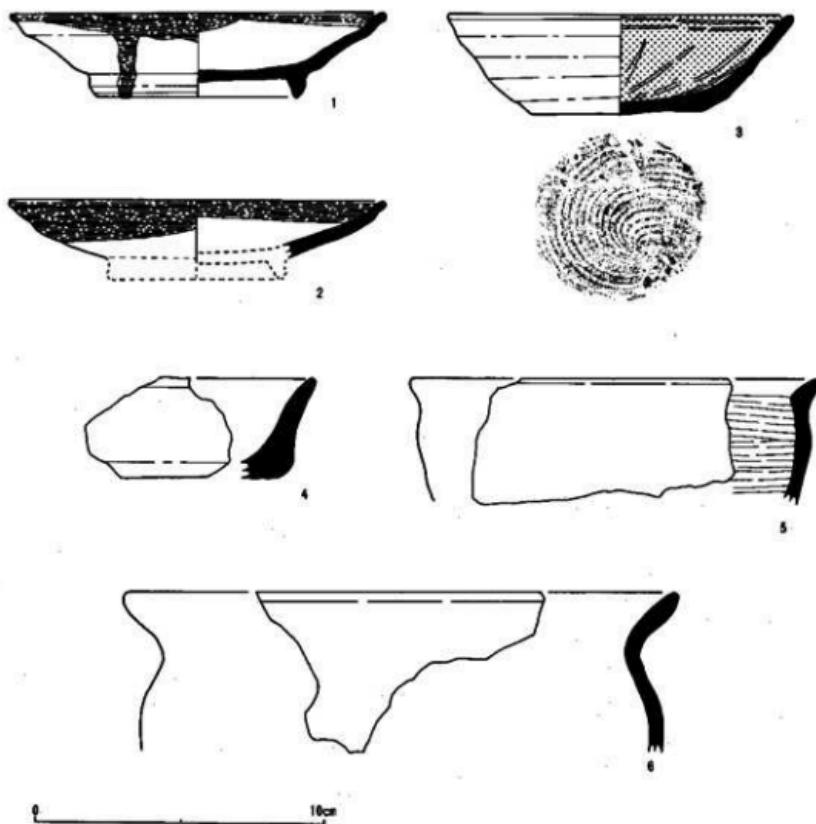
第8図 H1号住居址カマド実測図 (1:30)

(高村博文)

註1 藤井和夫（1979）『上浜田遺跡』神奈川県教育委員会

註2 永井規男（1975）『秋田の埋没家屋』『家』社会思想社のなかで「すなわちこの粘土は屋根板が動かないように固定することを一つの目的として塗られたものらしいのである」と書かれている。

註3 昭和39年、カマドを発見した際、検出した炭化物を川上村森林組合で鑑定を受けた所、イヌガヤであると報じられたが、樹種が全然成育する場所でないと材としては大きいものがないので器具に用いられるところで、本遺構から検出された大きな板材の材質とは思えない。



第9図 H1号住居址出土土器実測図 (1:2)

遺物（第9図、図版四）

出土遺物は、覆土から土師器杯形土器2個体及び壺形土器2個体を判別できる小破片が14点と床面直上から灰釉陶器皿形土器2個体及び壺形土器1個体、ならびに土師器环形土器1個体が出土地した。このうち図示できたものは6個体で、1～3が床面直上、4～6が覆土最下層出土のものである。層位的にはほぼ同一時期に帰属できる。1・2は灰釉陶器、3～6は土師器である。

1は口径13.0cm、器高2.9cmの皿形土器で、口縁部内外面は施釉されて淡緑色を呈し、内面には重ね焼きの痕跡が認められる。口縁部の約半分は欠損している。2も皿形土器で、口縁部が全体の4分の1しか残存しないが、推定口径13cmである。1・2とも灰白色を呈し、焼成は堅緻である。3は口径11.9cm、器高3.4cmのはば完形の環形土器で、内面は黒色を呈し、ヘラミガキによる暗文が放射状に粗く10本施されている。外面には、ロクロ痕と底部糸切り痕が明瞭に残る。4は口縁部が外反気味に立ち上がる杯形土器片で、焼成は良好で硬く、明褐色を呈す。5は口縁部が短く「く」の字状に外反して屈曲部内面に棱線をもつ壺形土器片である。外面の整形は不明であるが、胴部内面は横方向にハケ整形され、胎土には砂粒や金雲母などの含有鉱物が多い。6も壺形土器片であるが、口縁部がゆるやかに外反し、胴部が丸味を帯びるものである。胴部内外面ともナデ整形され、推定口径19cmである。

これら出土遺物について、検討してみると、灰釉陶器は、胎土及び器形の特徴からその生産窯は東濃系で折戸53号窯期に求めることができる。土師器については、内面黒色土器は平安時代に一般的にみられるものであり、4の杯形土器は、器形・焼成等からカララケの祖形要素がうかがえるものである。また、5の壺形土器はロクロ成形による可能性が強く、6は伝統的な長胴壺の形態変遷の一過程としてみれるが、いずれも小破片による土器観察に基づくため、速断は避けたい。

全体的に本住居址出土の土器群の在り方は、周辺地域との比較や灰釉陶器の生産窯の確定など詳細な資料分析をしないと断定できないが、佐久地方における該期遺跡の発掘調査結果を参考にすると、当地域にあっては普遍的な様相として把握できそうである。
（白田武正）

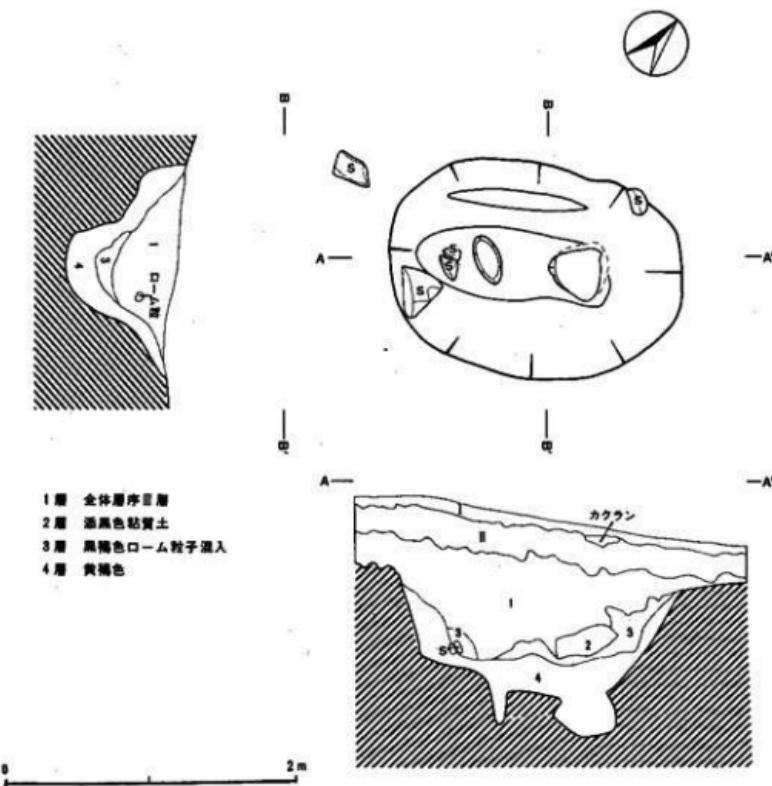
註1 佐久市三塚鶴田遺跡H1号住居址からは、灰釉陶器の皿・壺形土器が土師器の内面黒色杯形土器と併出し、灰釉陶器は東濃系で10世紀中頃から後半の所産であるとの所見が得られている。

（佐久市教育委員会（1976）『三塚鶴田』）

2 D1号土壤

遺構（第10図、図版四）

本遺構は、調査区北部のC・D-15・16グリッドに位置し、全体層序IV層上面において検出さ



第10図 D 1号土壤実測図 (1:40)

れた。H 1号住居址北側に位置するが、他遺構との重複関係はない。

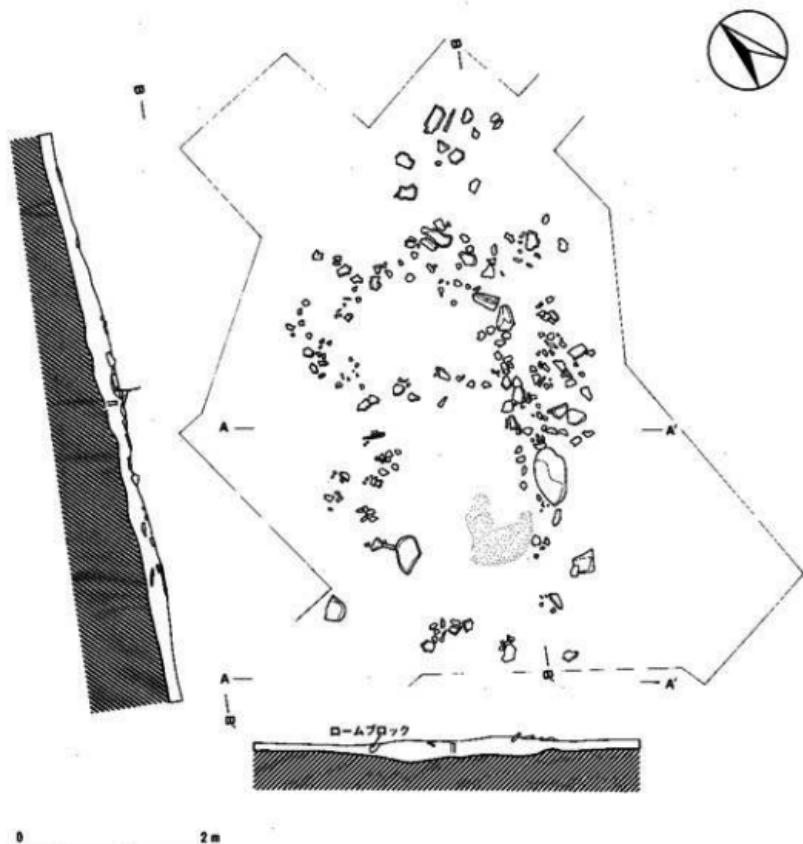
長径 200 cm、短径 148 cm を測り、平面プランは、やや不整な楕円形を呈する。長軸方向は、N -43° E を示している。

遺構覆土は、第10図の土層断面図 A-A' に示したように、第1～4層に区分される。覆土第1層は、全体層序Ⅲ層にあたる黒色土層であり、遺構のほぼ半分を充填している。さらに、第1層下部に第2層がブロック状に、第2層下には、ローム粒子を含み黒褐色を呈する第3層が入り込んでいる。最下部には、全体層序Ⅳ層の漸移層と考えられる黄褐色土層が認められた。これらの土層は、断面観察時の所見からして、自然堆積と思われる。

確認面からの深さは、70cm前後を測り、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。また、北壁は1段のテラスを有し、立ち上がっている。

底面では、2つのピットが検出された。このうち東側のピットは、東西径36cm、南北径34cm、深さ24cmを測り、平面不整形を呈する袋状のピットである。一方、西部のピットは東西径18cm、南北径34cm、深さ22cmを測り平面形態は細長い楕円形を呈している。

また、遺構内部において礫が4点、さらに遺構外に1点認められたが、遺構との関連は明確でない。なお、底面、壁ともに比較的しっかりとていた。



第11図 集石遺構実測図 (1 : 60)

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無である。したがって、本遺構の性格及び所産期等については、明らかにすることはできなかった。

(花岡弘)

3 集石遺構

遺構 (第11図、図版四)

本遺構は、発掘調査の初日の重機による表土削平を行なっていたおり、露出した焼土の性格を追求するため周辺の精査を行ない、B・C-6・7・8・9グリッドより検出された。IV章でも述べたように、全体層序II層の上部頃に存在し、他遺構との重複関係はない。

長軸600cm、短軸350cmの範囲に、厚さ約2cmの板状の礫が不整の楕円形状に存在する。長軸方向はN-38°Eを示し、板状の礫の下部に掘り込みはみられなかった。

また、遺構の南西部には、厚さ約2cmの焼土があり、その近くには頭大の礫が2~3個存在する。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、D1号土壤と同様その性格、所産期等については、明らかにできなかった。

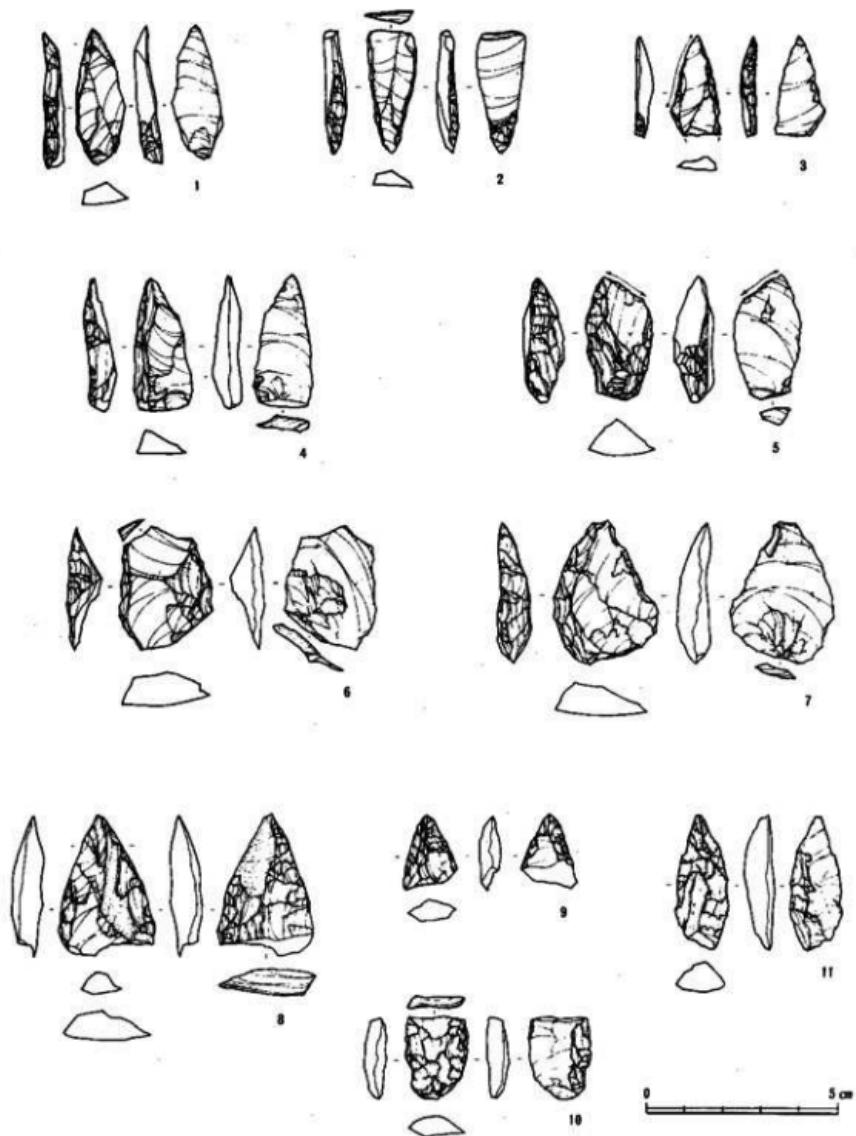
(高村博文)

VII 遺跡周辺の既出資料

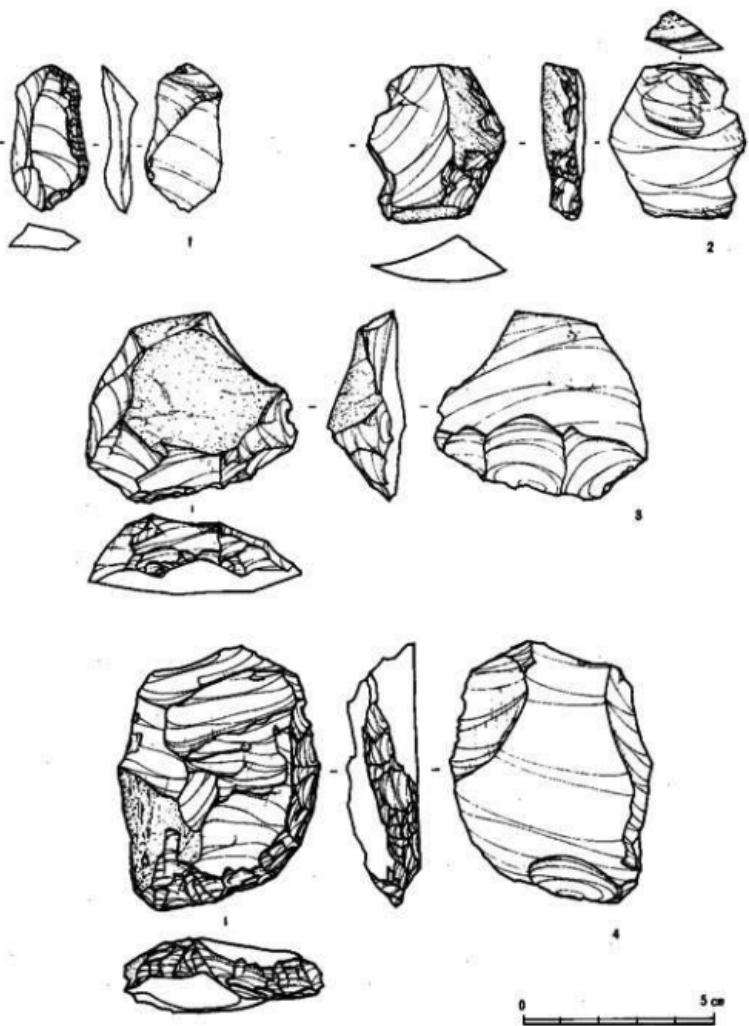
1 先土器時代 (第12~14図、図版五)

ここで扱う資料は、千曲川の支流である黒沢川に注ぐ2本の細流に狭まれた細長い台地上に存在する横尾遺跡と赤土平遺跡からの表面採集資料であり、由井茂也および由井満氏が所蔵されているものである。

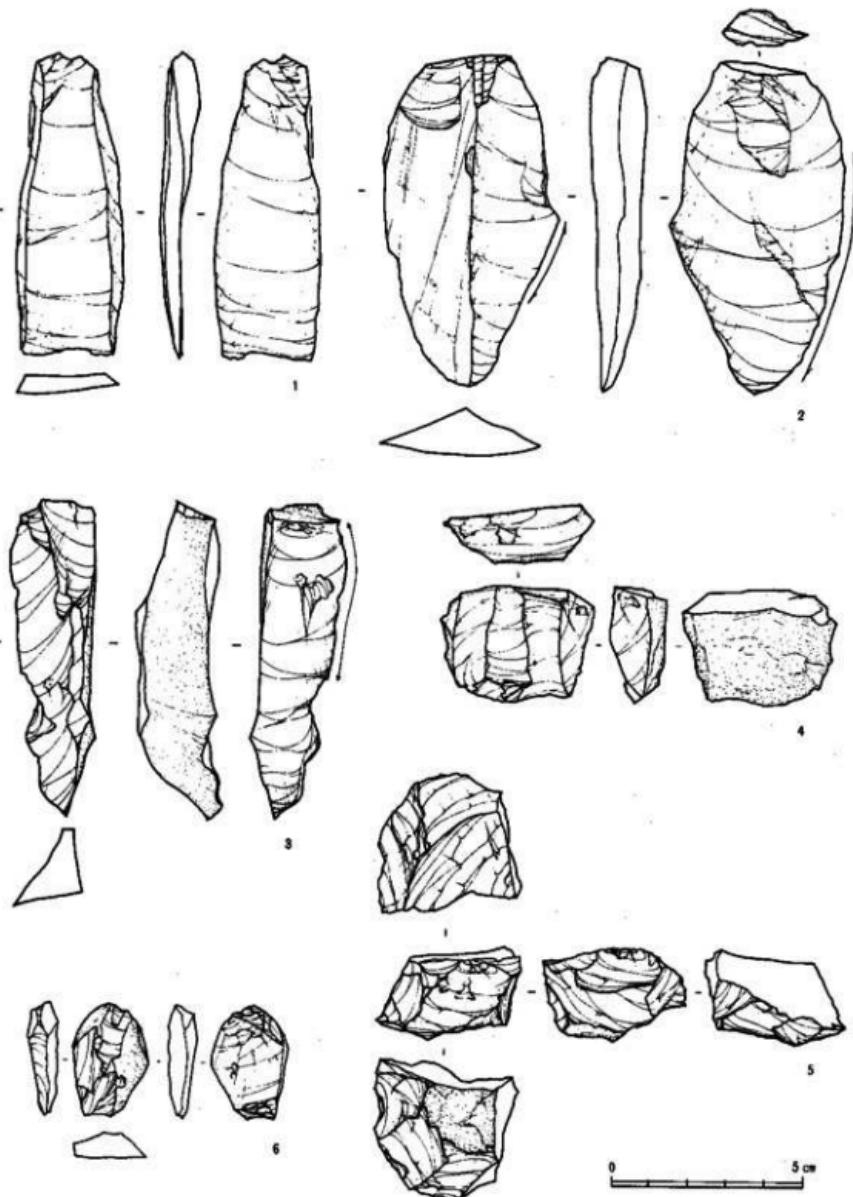
各石器に関する詳細は第3表に示した。図示したものには、ナイフ形石器7点、尖頭器4点、削器4点、石刃1点、剥片2点、石核2点、ビエス・エスキーユ1点がある。第12図1~3は黒曜石の縦長剝片を素材として二側縁に調整加工を施しているナイフ形石器である。2の裏面には基部加工が認められ、3の刃部には刃こぼれ状の小剝離痕がある。4はチャートの縦長剝片を素材として片側縁に調整加工が施されている。裏面の基部に打面が残っているナイフ形石器で断面は三角形を呈す。5~6はいづれも黒曜石の縦長剝片を用いている。5は切出形のナイフ形石器であり、打面は除去されている。刃部に小剝離痕が認められる。二側縁に調整加工が施されてい



第12図 先土器時代の既出石器実測図(1) (2:3)



第13図 先土器時代の既出石器実測図（2）（2：3）



第14図 先土器時代の既出石器実測図（3）（2：3）

第3表 先土器時代の既出石器一覧表

No.	器種	長さ	幅	厚さ	石質	備考
12-1	ナイフ形石器	34.8	13.0	5.2	黒曜石	二側縁加工、概長削片を素材。
12-2	"	31.3	13.2	5.2	"	二側縁加工、裏面基部加工有り、先端部は古い欠損。
12-3	"	26.5	13.5	4.2	"	二側縁加工、基部新欠、刃部に小剥離痕有り。
12-4	"	34.0	16.0	7.5	チャート	一侧縁加工、打面残置、概長削片を素材。
12-5	"	33.6	18.0	10.6	黒曜石	切出形、打面除去、刃部に小剥離痕有り。
12-6	"	31.0	24.0	8.0	"	打面残置、左側縁は折断後にプランティングが施される。
12-7	"	37.0	27.0	9.0	"	打面残置、調整の角度はおだやかなので、あるいはスクレイバーか。
12-8	槍先形尖頭器	36.5	24.6	9.0	"	扁平な小砾を素材とする。一部には入念な押圧剥離がみられ基部を古く欠く。
12-9	"	19.0	14.0	5.5	"	基部の大半を古く欠く。半両面加工。
12-10	"	21.5	17.0	5.6	"	先端部を古く欠く、半両面加工。
12-11	"	34.2	14.2	7.5	"	完形、概長削片素材、半両面加工。
13-1	削器	38.0	20.0	8.0	"	片側縁には入念な調整がなされスクレイバーエッジを形成。
13-2	"	41.0	35.0	11.0	"	概長削片素材、打面残置。
13-3	"	49.0	55.6	21.7	"	刃部にはインヴァースリタッチ有り。背面に自然面をとどめる。
13-4	"	71.5	52.5	17.5	"	素材の打面は折断によって除去、一部に大きなインヴァースリタッチ有り。
14-1	石刀	79.0	28.0	6.2	粘板岩	側縁の一部を新しく欠く。
14-2	使用痕を有する 削片	86.5	45.5	13.0	チャート	背面の片側には節理面が残る。
14-3	"	82.8	22.2	22.0	黒曜石	打面と側面に平坦な自然面を残す。
14-4	石核	30.5	40.7	13.0	"	上・下両端に打面を持つ、上位の打面は折れ面打面、背面には自然面が残る。
14-5	"	21.5	37.0	36.8	"	複制離面の打面をめぐるような形で削片が剥離されている。
14-6	ピエス・エスキュー	29.5	20.4	7.8	木晶	石器の両端には細かなつぶれ状の剥離痕が着取できる。

(単位はmm) (12-3・10・11、14-6は由井茂也著、他は由井潤氏著)

作表、提攜氏による

る。6の左側縁は折断後に調整加工が施される。打面は残置している。7は黒曜石の縦長剝片を素材としており、裏面には打面が残置している。左側縁の調整加工の角度はおだやかなので、あるいは削器としてもよいかも知れない。8～11は黒曜石を素材とした尖頭器である。8は扁平で両面に自然面を残している。一部には入念な押圧剝離がみられるが裏面がとくに丁寧に仕上げられている。9～11はいづれも小形のもので、半両面加工されている。9は調整剝離が中央にまで及ばないため緩やかな棱が形成されている。10の裏面も調整剝離が片側にしか施されていないために中央より片寄った棱が形成され、基部には打面が残っている。11は完形である。裏面の調整剝離は平坦になされているが、全面に及ばず縦長剝片を素材としていることがうかがえる。表面の調整は中央に棱を形成したままの荒い調整で断面は三角形を呈す。第13図1～4は、いづれも黒曜石を素材としている削器である。1の片側縁には丁寧な調整が施されスクレイバーエッヂを作出している。2は縦長剝片を素材とし、背面に打面が残っている。表面には一部自然面が残されている。3は表面に自然面をとどめている。比較的部厚い素材を使用している。4も分厚い素材で打面は折断によって除去されている。ほぼ $\frac{1}{2}$ 周縁に調整が加えられて入念に仕上げられているが、表面には一部自然面が残っている。第14図1の石刃は粘板岩を素材とする。2・3はいづれも側縁に使用痕と思われる面を有する剝片である。2はチャートで背面には節理がうかがえる。3は打面と側面に自然面を残している。断面三角形を呈し、左側縁は鋭利なものとなっている。4・5は黒曜石を素材とする石核である。上・下両端に打面を持つ上位の打面は折れ面打面である。5は、剝離面の打面をめぐるように剝離が施されている。6は水晶で、両端に細かいつぶれ状の剝離痕が認められるビエス・エスキューである。

(林幸彦)

2 繩文時代（第15図、図版六）

本遺跡の隣接地である赤土平遺跡から、第15図に示した打製石斧1、石鎌1、土器片4点が採集されている。⁽¹⁾

1の打製石斧は、硬砂岩の表・裏面を縦剝離した剝片を素材とするもので、形態は摺形を呈し反り身である。刃部は円刃を呈し、側縁はよく調整されている。頭部には微弱な摩耗が認められ、また、表面に自然面を残している。長さ19.5cm、最大幅9cmを測る大型である。

2は、黒曜石を素材とし、長さ25mm、最大厚4mmを測る大型の石鎌である。微細な剝離調整が施されている。⁽¹⁾

3～5の土器片は、深鉢の口辺～頸部にかけての破片である。半割竹管による連続爪形文が施されている。焼成は固く金雲母を含み赤褐色を呈する。内面調整はなめらかに磨かれており、諸磯b式期に比定される。6は、繩文が施されているが、焼成、色調、金雲母の混入等、前記の土器片と類似している。該期の土器には、胴部へ繩文を施したものが多いが、本例も同様の土器

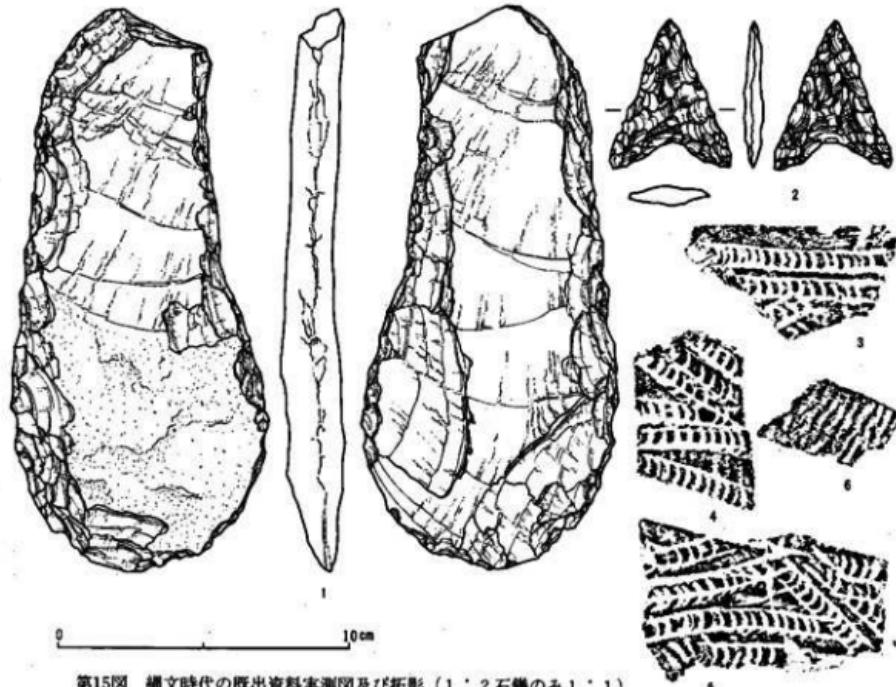
と思われる。

川上村における縄文前期の遺跡は、他に小川原・深山口・御堂窟遺跡等があり、諸磯 b 式期には御堂窟・深山口遺跡がある。近接する野辺山原のよしかしら遺跡は、前期初頭～前期末までの連続した資料が表採されている。その他、志なの入洞穴・海の口西原・広瀬野辺山・赤土遺跡が諸磯 b 式期の遺跡である。

さらに、南相木村大師遺跡からは諸磯期の良好な資料が出土しており、踏査の結果、出土地点周辺に住居址群の存在が充分予想された。また、松平地籍においては、昭和56年に高原野菜の畑を造成するため山林を切りくずしたところ、諸磯 c 式期の深鉢、磨製石斧が単独出土している。北相木村では、宮の平遺跡が諸磯期の遺跡である。

このように、海拔 1,000m 以上の奥地に営なまれている該期の集落は、いまだ山林の中に埋れていることが予想される。近接する南・北相木村、南牧村の該期の遺跡の広がりからも、未確認の遺跡存在の可能性大である。そして、海拔 1,000m 以上の山間地に存在することも注目される。

(島田恵子)



第15図 縄文時代の既出資料実測図及び拓影 (1:2 石器のみ 1:1)

註1 1の石斧は由井貞夫氏が、6の土器片は由井佳幸氏が、残りの土器片は由井大幸氏が採集し、石巣とともに由井茂也が所蔵している。

3 平安時代（第16図、図版六）

平安時代の遺物としては、土師器、灰釉陶器、須恵器が採集されている。このうち図示できた資料は10点にすぎないが、1・4は横尾遺跡、2・3は兵部遺跡、5～10は切草遺跡出土のものである。⁽¹⁾各器種にみられる特徴から、総じて平安時代後半期に位置付けられる。

ア 土師器

1は杯形土器の高台で、内面は放射状に暗文が施されている。高台は強く外反し足高気味である。2も同様に高台であるが、短く直立する。3は杯形土器底部で糸切痕を残す。9はいわゆる羽釜で、口縁部が全体の6分の1しか残存せず、推定口径は19cmである。胴部外面はタテ方向に粗くハケ整形され、胎土は金雲母を含み焼成は良好で暗赤褐色を呈す。10は變形土器で、口縁部が短く「く」の字状に外反し、屈曲部は肥厚させて内外面に明瞭な稜をもつ。整形は、内面はヨコ方向に細かく、外面はタテ方向に粗くハケ整形される。口縁部は全体の5分の1しかなく推定口径28cmである。胎土、色調、焼成とも9の羽釜に類似する。9・10は山梨県地方の該期變形土器に類例が多くみられることから、密接な関連が予想されるところである。⁽²⁾

イ 灰釉陶器

4～7は壺形土器の高台部分で先端は尖って内寄する。特に4・5の高台は三日月形高台で10世紀後半に比定されるという。8は長頸瓶の口縁部である。胎土はともに灰白色を呈し堅緻である。東濃系折戸53号窯跡に類例を求めることができる。さらに図示できなかったが横尾遺跡から東山83号窯跡の折れ端し皿の口縁部が出土しており、11世紀前半（1025～1050年）に比定される⁽³⁾という。

ウ 須恵器

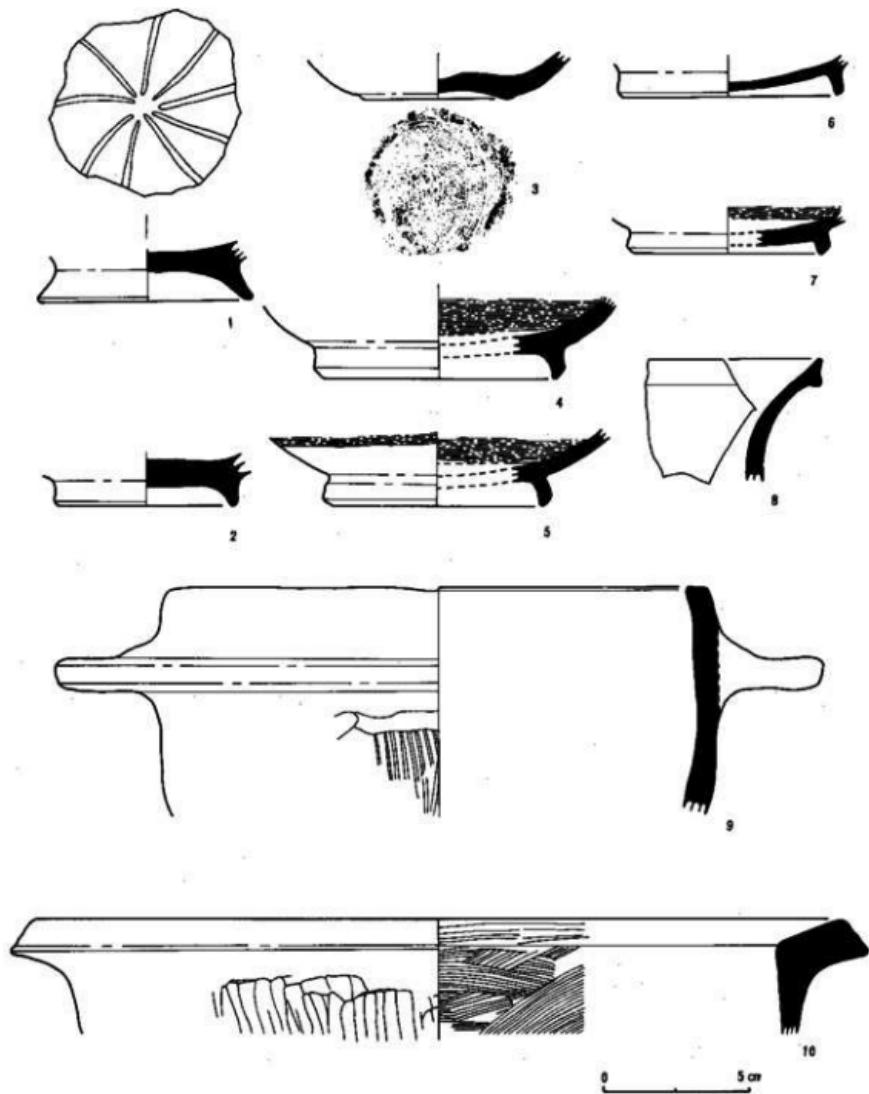
図示できなかったが、切草遺跡から、變形土器片4点と四耳壺と推定される同一個体片6点が出土している。⁽⁴⁾（白田武正）

註1 1は由井佳幸氏が、4は由井貞夫氏が、残りの兵部・切草遺跡出土の土器は由井茂也が所蔵している。

註2 菊島美夫（1976）「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」「甲斐考古12—2」

註3 愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏の御教示による。

註4 註3と同じ。



第16図 平安時代の既出土器実測図 (1 : 2)

VII まとめ

横尾遺跡において検出されたそれぞれの遺構・遺物については前述した。検出された遺構は、平安時代竪穴式住居址1棟、土壙1基、集石遺構1基がある。一方、出土した遺物は、土師器、灰釉陶器がある。

検出された遺構のD1号土壙・集石遺構については、遺物の出土がなく、性格及び所産期等については言及できない。しかし、集石遺構については、全体層序Ⅱ層の上部に存在することから、H1号住居址・D1号土壙の覆土状態と比較して、後出するものと推察する。以下、H1号住居址を中心とした記述を行ないまとめてみたい。

1 佐久地方の焼失住居址について⁽¹⁾

佐久地方の古墳時代後期以降における焼失住居址の検出例は、鬼高郡に佐久市で市道第1・3・9号住・跡部町田H1・2・3号住、下小平H1号住・清水田H1・2・3号住、中道H3号住の11棟。小諸市で五ヶ城第7・13・14号住の3棟。白田町で井上H3号住の1棟と計15棟知られている。奈良時代は、現在のところ検出例は知られていない。平安時代では、望月町で新水A第1号住・竹之城原第4号住の2棟、佐久市で西八日町の2棟、小諸市で曾根城第3号住と本遺跡の1棟で計6棟検出されている。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾

現在、報告書から知られている鬼高郡の住居址検出例は51棟で、そのうち焼失住居址は11棟と⁽¹⁰⁾かなり高い割合で焼失していることがうかがえる。一方、平安時代の住居址の報告例は、92棟で⁽¹¹⁾そのうち焼失住居址は、新水A・曾根城と本遺跡の3棟しか報告されていない。今後の整理、発掘により資料は増すものと思われるが、現時点における鬼高郡の焼失住居址検出率が高いことは注意していく必要があろう。⁽¹²⁾

次に炭化材の出土状態であるが、床面直上の検出例がほとんどで、本遺跡と同様のすこし浮いた状態での検出例は、清水田遺跡ぐらいであり、住居址廃絶後に出土したのではなく、日常生活中に何らかの原因による火災が多いものと思われる。炭化材は、棒状あるいは丸太状と板状の2種類がほとんどで、板状の炭化材を検出した遺跡で、本遺跡と類似しているのは、新水A遺跡第1号住居址だけである。主柱材と明確にわかる炭化材が検出されているのは、井上H3号住・市道第9号住・跡部町田H1号住の3棟だけで、他の焼失住居址では、いずれも不明確なものとなつており、棒状あるいは丸太状の炭化材のほとんどが垂木として使用されているものと報告している。材質は、市道・下小平・跡部町田遺跡でナラと報告されており、五ヶ城遺跡では広葉樹と記載されている。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

本造構と同じ平安時代の焼失住居址である新水A遺跡第1号住居址の板状の炭化材は、壁材として用いられたものと報告されているが、本造構の場合、板材は壁から住居址中央に落ち込んでおり、壁際が高くなっていることから、屋根材として使用されたものと思われる。さらに、板材の上から木皮の炭化材が検出され、その上に焼土が濃く分布していたことから、屋根板の上を木皮で覆い、その上にさらに土を塗って固定し、寒さにたいして保温する役目も果したものと考えられる。⁽¹⁶⁾

主柱材が不明確なことは、後でもふれるが鬼高窓から平安時代にかけて主柱穴の検出されない豊穴住居址とともに注目される。

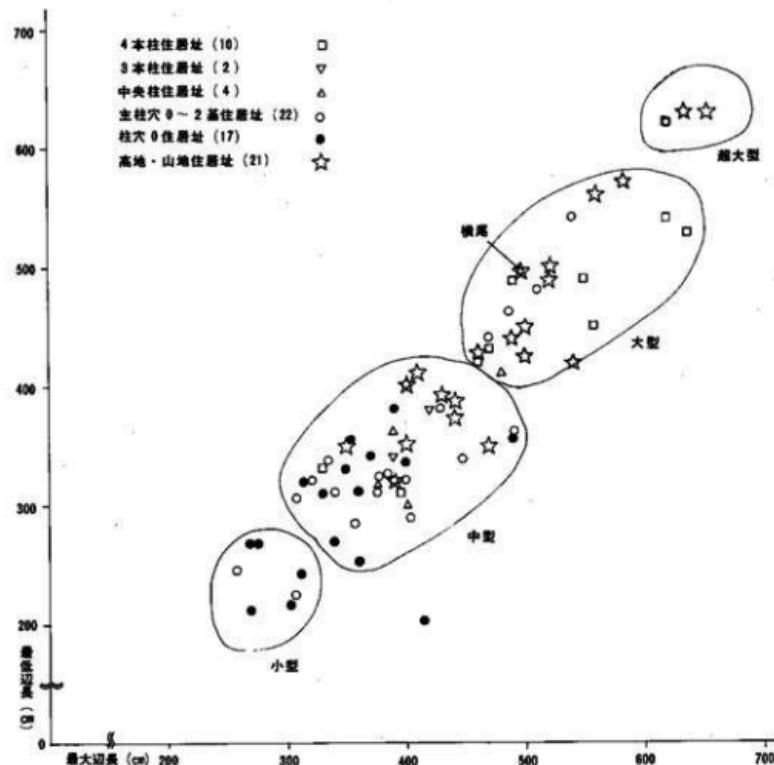
本造構からは、床板が検出されている。佐久地方では、市道遺跡第3号住居址において「南西隅付近の床面1cmの所からは、大きさ30×50cmおよび25×40cm、厚さ2.5cmの2枚の板が検出されている。床板のように思われるが、2の炭化材は一部で重なっており速断は許されない」と報告されているが、確実に床板かどうか疑問が残る。全国的にみても、板敷と認められる例は非常に少なく、県内の平出遺跡第22号住居址、静岡県登呂遺跡第1号住居址と千葉県市営総合運動場⁽¹⁷⁾内遺跡⁽¹⁸⁾29・31・34号住居址の5例だけである。平出遺跡第22号住居址については、小柱穴の配置からの複元推定であり、総合運動場内遺跡29・31・34号住居址についても遺跡が国府跡の近接する地であり、上記3住居址の規模が大きく、集落の中での位置が特異でしかも、柱穴を6～9個有し、主柱穴である四個の深さに比べて中間の柱穴は浅く、東柱用の柱穴ではなかったかとして板敷床を持った住居址と複元推定している。登呂遺跡第1号住居址においては、床面に多くの木材が遺存していたものの、床板とする考え方と板葺屋根の一部とする考え方の2つに見解が分かれている。本造構で検出された床板は、北東隅に長さ約2m50cm、幅20～27cm、厚さ2～4cmの板材を東壁下から平行に北壁に沿って5枚規則正しく根太材の上にのせて敷かれていたものと考えられ、板敷推定面積は約3m²を測る。全プランの推測面積は約19.5m²であり、およそ6から7分の1の床面は確実に板敷と考えられ、これから研究資料として貴重なものと思われる。

2 主柱穴について

佐久地方の鬼高窓において柱穴が1基も検出されない例は、上桜井北H9・17号住、宮ノ北第4号住の3棟報告されており、跡部町田H2号住と曾根城第2号住は主柱穴が1基だけ確認されている。また、関口B遺跡第5号住居址では、住居址中央部に浅く不整形なピットが1基検出されただけで、主柱穴と考えられるピットは確認できなかつたとしている。⁽²⁰⁾

奈良時代では、資料数が少ないためか、現在のところ柱穴が1基も検出されない住居址の報告例は知られていない。⁽²¹⁾

平安時代では、柱穴の不明確な住居址が多く、むしろ4隅に明確に主柱穴が検出されている例



第17図 佐久地方の平安時代住居址規模別分布図

は、周防畠 A H 1・4号住、戸坂 K 1号住、舞台場 H 1・30号住、宮ノ北第8号住、五ヶ城第9号住、金塚第1号住の8棟だけである。次に、主柱穴が3隅に検出されている例は、周防畠 A H 2号住、蛇塚 B H 3・5号住の3棟あるが、このうち蛇塚 B 遺跡 H 3号住居址については、丸山日出夫氏の上屋構造の研究によればカマドの上部に4本目の柱が存在したと考えることができ、4本柱の住居址と思われる。また、住居址中央付近に柱穴を有する住居址は、上桜井北 H 6号住、三塚鶴田 H 1号住、関口 B 第3号住、曾根城第3号住の4棟検出されている。

前述したように、佐久地方における平安時代の住居址検出例は、報告書から92棟知られているが、プランが破壊されていたり、完掘できなかったり、カマドのみ検出されたなど不明確な住居

址を除くと、資料的に使用できるのは55棟ある。そのうち柱穴が1基も検出されない住居址は17棟あり、さらにピットは検出されるが主柱穴と断定できないものや、主柱穴も1基又は2基しか確認できないもの（住居址中央柱穴を有するものは除く）を含めると40棟あり、約73%の割合で主柱穴の不明確な住居址が存在することがわかる。

形態は、隅丸方形が多いが方形、隅丸長方形等いろいろなプランも知られている。規模は、第17図に示したように小型～超大型まであり、この分類からはみだした住居址には五ヶ城遺跡第3号住居址があるが、これは形態が台形で方形プランから著しく異なるため、他の住居址はほぼ方形に近いということもうかがえる。規模の分布は、小型7棟、中型33棟、大型13棟と超大型1棟となり、この時期佐久地方では中型の住居址が一般的規模といえそうである。

4隅に柱穴を有する住居址の分布を見ると（超大型規模の蛇塚B遺跡H4号住居址は、北西隅に柱穴が検出されていないが、ちょうどその部分に擾乱があり、もし仮りに柱穴があったとすれば同遺跡H3号住居址と同様カマドの上に柱があったと考えられる4本柱の住居址と思われ、その意味ではH3・4号住居址も含めて）、中型2棟・大型7棟・超大型1棟となり、資料数が少ないため速断はできないが、大型住居址に多く存在することがわかる。

柱穴が1基も検出されない住居址の分布を見ると小型住居址7棟のうち5棟を占め、中型に11棟存在するが中型の中規模程度から小型に近い方に多く存在することが見てとれる。しかし、ピットは検出されるが主柱穴と断定できないものや、主柱穴も1基又は2基しか確認できない住居址は、小型～大型の住居址に満遍なく存在し、規模による偏在は見られない。

上述のように、平安時代における住居址の主柱穴の在り方を中心にしてきたわけであるが、主柱穴のはっきりしない住居址は全体の7割弱に達しており、あるいは（主に小型住居址）主柱のない上屋構造の研究を行なわなければならないと考える。また、少數ではあるが住居址中央部に柱穴を有する住居址についても注意してゆきたい。

3 高地集落

平安時代に見られる山地の集落で、最初に注目して報告されたのは、昭和32年「長野県埴科郡松代町西条地区入組船場遺跡調査概報」である。その中で、永峯光一氏は「調査は早期縄文土器の発掘に主眼を置いていたのであるが予期に反して……新しい土師器と灰釉陶器とを伴う竪穴住居址二箇を発掘する結果となった。然し、現在においても、主要な附近の農耕聚落に較べ、遙かに山深い高地に、土師器や灰釉陶器を伴う竪穴住居址を確認したことは、これまであまり注意されていない歴史時代初期村落の性格的一面について、探究の端緒となり得るものであろうと考えている。……決して農耕適地とは考えられない山奥に、土師器や施釉陶器を伴う竪穴住居址が數箇も存在したことは、そこに当然農耕以外の生業をもつて少なくとも半定住的な生活を送った人々の居

住……律令制から庄園制への過渡的な時期に際しての歴史的動態からも理解されるべき面をもつているのではなかろうか」と高地における平安時代住居址の存在を指摘した。その後、幾つかの報告例がなされ、昭和43年、桐原健氏がこれらを集めて分析して「平安期に見られる山地居住民の遺跡」の中で初めてこうした遺跡の性格について言及した。

その中で桐原氏は、まず、「信濃遺跡地名表」(1956)と「全国遺跡地図一長野県一」(1967)を併用して、県内における水稻農耕を生業とするには不適な地に営なまれている遺跡を指摘し、北信地域は73遺跡、中信地域の松本平には32遺跡、木曾谷では35遺跡、東信地域では佐久地方である碓氷の山付近の谷筋の7遺跡を含めて11遺跡、南信地域の八ヶ岳周辺に30遺跡、伊那谷は水稻農耕を生業するには不適として除き、山中で営なまれている170遺跡が平安時代の全遺跡の14%を占めているとし、該期の民衆の生活を考える上に忽がせにできない数値であるとしている。

さらに、県内の山上遺跡の調査例7遺跡の分析を行ない、1、遺跡の規模が小さい。2、竪穴の規模が小さくカマドもラフで全体に安直にできている。3、竪穴の重複例が多い。4、どの遺跡からも灰釉陶器が出土しており、出土例は少ないが鉄滓や八稜鏡などが出土している。と以上4点の共通点をあげ平地に営なまれている住居址との比較から山地遺跡の特徴としている。続いて、山地遺跡を構成した人々の性格、生業について言及し、1・2・3の特徴から山中流浪の山の民で、マタギ、木挽、木地屋、箕直し、鍛冶鋸掛屋等をあげ、さらに民俗学柳田国男氏の炭焼藤太の伝説や藤森栄一氏がとりあげた奥信濃秋山郷の人々の生活を例にひきながら、鉢物師などの特定の職にたずさわった人々の仮り住いの可能性が強いとし、また、移動的な特徴のための住いの可能性もあると述べられている。そして、山地遺跡からは灰釉陶器が多く出土することや、遺跡の位置が山中を走る交通路、峠に当っていることから、白瓷運搬の一翼を荷なった自由な民であろうと結んでいた。

では現在、佐久地方ではこれら山地の遺跡はどのくらいの数に達するものだろうか。その前に山地の遺跡とは、どのような基準を当てはめたらよいかを考えなければならない。桐原氏は水稻農耕を生業とするには不適な地と一応の目安を設定している。

近代、佐久地方の水稻農耕の不可能な地域を考える時、昭和5年田中啓爾氏が「中央高地における米作り高距の限界線は、約1,100mに達し1,300mに至れば全く米作不可能である。又1,100m以下900mの地域は限界線の屈曲地域でそこは早稲本位栽培地であり……」となされている。また、井出正義氏が調べた中世の記録によると、建武2年(1335)の大徳寺文書に鷹野郷(現佐久町高野町、標高740~760m)には水田が、確実にあったと考えられる記載がなされている。次に畠物村(現八千穂村畠、標高760~780m)では畠の書き方が他の郷村(平坦部の水田地帯)の場合と違うことと村の名称から類推して畠作ではなかったかと思われ、さらに保間(現小海町本間、標高800~820m)では、本島と記載されており完全な畠作と考えられ、水田はなかった

のではないかと思われるところである。さらに、井出氏の調査によれば佐久地方における古墳の南限は、佐久町高野町域陰の塚畠古墳（標高 740～760 m）と同町平林曾原の入沢20号古墳（標高 800～820 m）が当たるとされ、また、それに先行する弥生時代後期のまとまった集落址の南限もやはり佐久町高野町の佐久西小学校裏遺跡（標高 760～780 m）であり、弥生時代後期から南北朝時代の稻作の高距的限界線は、標高 750～800 m の範囲内に有り 900 m に至れば全く不可能な地域として問題はないと考える。

そこで、佐久地方における標高 900 m 以上の遺跡を高地遺跡と定義し「全国遺跡地図一長野県一」⁽³⁹⁾（1983）と「遺跡地名表」⁽⁴⁰⁾（1981）を併用してこれらの遺跡を摘出すると 188 遺跡知られており、その時代別数は第 4 表に示したとおりである。弥生時代の 18ヶ所のうち 5 遺跡は磨石鋸、扁平片刃石斧の単独出土で集落址とは考え難く、実質は 13 遺跡（約 7%）に減るものと思われる。高地遺跡全体の各時代の割合は、縄文時代が 8 割を占め、弥生時代以降では平安時代が約 4 割に達するほど多く、弥生時代・古墳時代とその割合は減少している。⁽⁴¹⁾

次に時代別遺跡数からの割合を見ると弥生時代 7%、古墳時代 6%、平安時代 13% となりいずれも平安時代の高地遺跡の占める割合は突出している。また、弥生時代から古墳時代の高地遺跡の割合は、若干であるが減少しておりこのようないずれも増加・減少については、人々の生産及び社会形態の変化に対応した現象と考える。

先に桐原氏が集成した資料に若干の新資料を加えて高地・山地集落の調査報告例を第 5・6 表に示した。山地集落と高地集落にした理由は、山地集落の中には山中といえ小規模な稻作による生活手段の可能性が考えられ、高地集落は概念的には山地集落に包括されるものであるが、前者のような生活手段の可能性は一切考えられない点で分類した。しかし、単純に標高 900 m という基準線で画一的に社会形態を分割することはできないのでその性格・生業等についてはある程度包括的に押し進めてゆきたい。

高地集落は群馬県の 2 遺跡の資料を加えて 9 遺跡 16 棟の住居址、山地集落は 10 遺跡 17 棟の住居址の存在が確認されている。しかし、その他にも山地・高地集落の

概念に含まれない遺跡で単独に検出される住居址がある。佐久市小宮山の後沢遺跡では、弥生時代・古墳時代の集落址の中に平安時代の住居址が 1 棟だけ単独に検出されている。後沢遺跡は千曲川・片貝川により形成された広大な沖積

第 4 表 佐久地方の高地遺跡数と割合

時代	高地遺跡(B)	割合(B/A)	遺跡数(C)	割合(B/C)
先土器	20	11%	41	49%
縄文	152	81%	943	16%
弥生	18	10%	271	7%
古墳	9	5%	141	6%
奈良	1	—	5	—
平安	73	39%	561	13%
高地遺跡数	(A) 188		1,187	16%

地である野沢平を一望に見渡せる舌状台地に存在する遺跡で山地とは考えられない。同様な例が県内では長野市安茂里の平柴平遺跡、時期は奈良時代であるが同様に単独で塙尻市塙尻桟敷の中島遺跡で検出されている。このような例は南関東で中山吉秀氏（1976）が「離れ団分」として集成、分割されており上述の3例はあるいはその性格の一端を荷った人々の生活址かもしれない。

高地・山地集落の遺跡の規模は、群馬県熊倉遺跡が特別で住居址と思われる凹地が40ヶ所確認されたとしている。他は新水遺跡の5棟が一番多く、1棟あるいは2棟の小規模の遺跡が一般的といえそうである。

堅穴規格は推定プランを含めて21棟の資料を使用して前掲した第17回佐久地方の住居址規模別分布図に入れると、最低規模は新水B遺跡第1号住居址の390×320cmと稻葉遺跡N住居址の(350)×(350)cm、最大規模は乗落遺跡の630×(650)cmである。規模の分布は、佐久地方の住居址の規模で中型とされる中に9棟、大型に10棟、超大型に2棟と分布しており、中型規模の中でも中位から上位付近に偏っている。このことから山地・高地住居址の規模は決して平地の住居址（佐久地方の平地住居址）に比べて小さくはなく、むしろ大型の傾向がある。

カマドについては検出されている住居址が23棟あり、そのうち横尾・兵士山・沖ノ沢・池尻遺跡の4棟は保存状態もよく、かなりしっかりと石組のカマドで平地の住居址と比較しても見劣りしないカマドだといえる。他の住居址のカマドについても平安時代のカマドは鬼高期のカマドに比べかなり難に構築されているものが多くみられ、一概に山上の遺跡の方がラフだとは考えられない。

重複関係ではカマドのみ検出の位沢・沖ノ沢遺跡と土師器の出土だけで調査の行なわれていない中の坂遺跡を除くと蒲田、新水A2・3号住、七本松2号住、稻葉N住、竹之城原第4号住の5ヶ所で重複が見られる。他の26棟14ヶ所ではみられず平地との比較は行なわなかったが、必ずしも多いとはいえない。

出土遺物については、鉄津、鉄製品が熊倉2号住、兵士山、井堀、七本松1・2・3号住、竹之城原第4号住、八丁原、池尻、稻葉、乗落の11棟とかなり高い率で出土しており、特に七本松遺跡第1号住居址では「工作址」的な見解があり、また、池尻遺跡においてはふいごが出土しており、原島礼二氏の鉄の流通から考えて野鐵治の全国的な分布と関連させ「鐵治址」の性格をもつ住居址かもしれないとしている。

次に灰釉陶器が多く伴出していることである。佐久地方の灰釉陶器出土例は、昭和29年「灰釉陶器の諸問題」で芦田村（現立科町）池ノ平、三都和村（現立科町）藤沢、本牧町（現望月町）印内の三ヶ所を出土地として記載されており、その中で大場磐雄氏は「将来必ずや相当量の発見例が追加されることを確信できる」と明言しておられる。⁽⁴⁹⁾ 続く昭和31年「信濃史料第1巻考古篇上」では、立科村（現立科町）池ノ平、小諸市大塚原、穂積村（現八千穂村）鐵治ノ入の3遺跡

第5表 高地集落一覧表

No	遺跡名	所在地	立地(標高)	住居址プラン(東西×南北)	カマド	出土遺物	時期	備考(文献)
1	佐久沢	南安曇郡安曇村	山腹(1,400m)	カマドのみ	石縁カマド	土師器(皿)	平安時代	柳原龍(1978)「信濃における陶馬の史的研究」『中部高地の考古学』
2	奥尾尾	南佐久郡川上村	山腹(1,354m)	隅丸方形 495×495cm	西壁南寄り	土師器(环、盤)、灰陶陶器(皿、碗)、焼失住居址	0~53	木造跡
3	山本塙	小糸谷郡真田町	山腹(1,240m)	2 1住方形(350)×(400)cm 2住 × 440×385cm	北壁西寄り 東壁南寄り	土師器(环、盤)、灰陶器(环、小形広口盤)、灰陶陶器(平) × (x, x)、× (可凹、盤)	0~53	川上光・他(1977)「菅平高原山本塙遺跡」『長野県考古学年報23』
4	奥倉	群馬県吾妻郡六合村	段丘(1,200m)	1住隅丸方形 635×635cm 2住 × 435×500cm 3住 × 540×420cm 4住	南壁西寄り 東壁中央 東壁	土師器(皿、碗)、平石 × (x, x, x)、鉢 土師器(皿、環)、灰陶器(皿、碗)、灰陶陶器(高脚)、平石	9世紀中葉から10世紀前半	近藤登(1983)「越後道跡の再調査」『群馬文化153』 尾崎友雄(1971)「火山噴出物堆積と遺跡」『志茂樹博士著記念論集』 信濃史学会
5	明星里敷	草野町	台地(1,030m)	1棟		土師器(皿、碗)、灰陶器(环)、灰陶陶器(碗)	平安時代中頃	中村龍雄(1968)「伊那と諏訪をむすぶ高地性道路」『伊那路12~4』
6	瀬田	南安曇郡安曇村	山腹(1,000m)	2棟?		土師器(皿、碗)、灰陶器(皿)、灰陶陶器(皿、碗)、鉢	平安第5~6様式	中島豊雄・植口昇(1958)「長野県南安曇郡安曇村瀬田遺跡調査報告」『信濃3~3』
7	京宮	木曾郡王滝村	扇状地(975~982m)	長方形(375)×(440)cm	南壁西寄り	土師器(皿)、灰陶器(碗)、灰陶陶器(皿、段皿)、碗	東後承虎渋洪山1号窯期 12世紀前半	神村達(1978)「御岳神社里宮遺跡発掘調査報告書」
8	兵士山	佐久市	山腹(970m)	隅丸方形 560×560cm	北壁	土師器(平、碗)、灰陶器(环、碗)、灰陶陶器(碗)、鉢製品、砾石	0~53	
9	井場	群馬県吾妻郡草津町	台地(960m)	不等方形 445×470cm	東壁中央	土師器(碗、盤)、灰陶器(皿、碗、盤)、灰陶陶器(皿?)、鉢	9世紀中葉	井上准雄(1974)「井場遺跡発掘調査報告」草津町教育委員会

第6表 山地集落一覧表

No	遺跡名	所在地	立地(標高)	住居址プラン(東西×南北)	カマド	出土遺物	時期	備考(文献)
1	新水	北佐久郡望月町	山腹(860~870m)	A 1住 隅丸方形(400)×400cm 5 A 2住 ×(385)cm A 3住	東壁	土師器(平、碗)、焼失住居址 × (x, x)、灰陶陶器	10世紀末から11世紀 初期	福島邦男(1981)「新水」望月町教育委員会
2	沖ノ沢	岡谷市	山腹(860m)	カマドのみ	西壁	土師器(环、盤)	平安時代	戸沢忠則(1973)「岡谷市史 上巻」
3	竹之城原	北佐久郡望月町	山腹(850m)	方型 390×430cm	東壁南寄り	土師器(环、盤)、灰陶陶器(皿)、鉢製品(轆轤車、封、鉗、刀子)、焼失住居址	0~53	福島邦男氏の調査による
4	七本松	松本市	山腹(850m)	3 1住 2住 3住 隅丸方形 390×320cm	東壁	土師器、燒毛器、灰陶陶器、鉢製品、鉄矛 × (x, x)、鉢 土師器(皿、碗、盤、杯)、灰陶器(环、碗、盘、蓋、鉢)、灰陶陶器(皿、碗、小口盤)、灰陶器	10世紀後半から11世紀前半	松本県立丘陵校風土研究部(1982)「三才山七本松遺跡調査報告」『信濃14~1』
5	御所平	佐久市	台地(820m)	方型 410×(410)cm		土師質土器(皿、碗)	平安時代末	阿部謙(1961)「長野県下高井郡山之内町八丁茅遺跡調査時報」『信濃13~6』
6	八丁原	下高井郡山之内町	山腹(800m)	不等方形 350×(450)cm	北壁東寄り	土師器(皿、碗)、灰陶器(碗)、鉢製品	平安時代	阿部謙(1961)「長野県下高井郡山之内町八丁茅遺跡調査時報」『信濃13~6』
7	海尻	更埴市	山腹(790m)	長方形 490×520cm	西壁	土師器(环、碗、盤)、鉢製品(升、鉗)、鉢洋、砾石 壘體器、土製品(ふなご)	平安時代	下平秀大(1970)「長野県更埴市海尻池遺跡調査報告(2)」『信濃22~4』
8	中の坂	小諸市	山腹(650~700m)	1棟?		土師器(环)	平安時代	花岡洋(1974)「中の坂遺跡の土器」『小諸市歴史文庫』11
9	相葉	長野市	山腹(650m)	2 N住 隅丸方形(260)×(260)cm 5住 × 500×520cm	東壁	土師器(皿)、灰陶陶器 土師器、燒毛器(皿)、灰陶陶器、鉢製品	平出第5~6様式	水野光一・鈴木孝志(1957)「長野県塩科郡松代町西入郷遺跡調査報告」『信濃9~4』
10	東落	下木内郡常村	山腹(560m)	方型 630×(650)cm		土師器(皿)、燒毛器(皿)、灰陶陶器(皿、水瓶、小口盤)、鉢製品、鉄矛、八咫鏡	0~53	柳原龍(1968)「平安間に見られる山地居住民の遺跡」『信濃20~4』

第7表 佐久地方の灰釉陶器出土遺跡一覧表

市 町 村 名	遺 跡 名	備 考	市 町 村 名	遺 跡 名	備 考
立科町 (2)	池ノ平	昭29・31年調査	佐 久 市	周防畠 A	昭54年調査
	信州林			〃 B	昭55年 〃
望 月 町 (10)	笠森			中村	昭57年 〃
	大網	昭53年調査		兵士山	昭54年 〃
	寺久保 B			横村	昭57・58年 〃
	書院寺 A			萩の入	(萩)高見沢場
	新水	昭56年調査		月夜平	
	又久保	昭55年 〃		月通武	
	鶴鳩沢	昭56年 〃		鬼神出	は
	岩井	昭57年 〃		山の前	
	金翠	昭56年 〃		西の雍	
	竹之城原	昭58年 〃		五雲西	
浅科村 (1)	堀久保			馬寄	
小諸市 (6)	大坂原	高台付近		寺久保	
	小幡在家			九井戸	
	久保田	昭58年調査		たつま久保東	
	宮の北	昭54・55年 〃		影	
	五ヶ城	昭55年 〃		地獄鬼塚	
	曾根城	昭57年 〃		雁明	
佐 久 市 (22)	裏林			宮の本	昭53年調査
	小倉			千手院	
	平			五領臺	里(底部)
	中屋敷			サイカチ平	
	熊の倉		八千穂村 (2)	銀治ノ入	高台付近
	蛇塚 B	昭55年調査		蓮開	〃 2(完形)
	芝宮	昭54・55・57年調査	小海町 (1)	八の轎井沢	
	一本郷	昭47年調査		中ツ原	
	上塙井北	昭52年 〃	南牧村 (1)	馬糞場	
	三塙越田	昭50年 〃		切草	
	後武	昭51年 〃		横尾	本調査
	中道	昭46年 〃			
	上ノ城	昭48年 〃			
	西八日町	昭58年 〃			
	北西久保	昭44・57年 〃			
	和田上南	昭54年 〃			
	舞古場	昭56年 〃			

白田町については三石紙雄氏より、佐久町、八千穂村、小海町、南牧村については井出正義氏より御教示賜わった。

知られており、この時点では佐久地方の出土例は5例であった。昭和43年「瓷器の道(1)」の中では上田市、小諸市、北佐久・南佐久・小県郡を含めて9例と紹介しており、出土例は増加していない。しかし、近年佐久市・小諸市・望月町における緊急発掘調査や県史、各市町村が実施した分布調査等の成果により、爆発的に増加し第7表に示したように66遺跡に達している。現在、佐久地方においても発掘調査による平安時代後半の集落址では上小地区と同様にほとんど灰釉陶器が伴出している。出土した灰釉陶器の種別では皿・焼形土器が一番多く長頸瓶や小瓶も見られ、皿形土器の中には段皿・輪花皿・耳皿などの種類も知られている。

佐久地方の灰釉陶器は東濃系のものがほとんどで、三塚鶴田・犬飼遺跡では美濃系のものが報告されており、入山崎遺跡には猿投系の皿が、また、西八日町遺跡出土の長頸瓶は10世紀前半の猿投系のものであるとのことである。⁽⁵³⁾しかし、佐久地方では折戸53号窯期のものがほとんどと考えられており、すでに述べられているように、⁽⁵⁴⁾この時期灰釉陶器は当地方でも広汎に人々の日常容器として使用されていたものと考えられる。

山地・高地集落の時期は、9世紀中葉から10世紀前葉に井堀・熊倉の2遺跡が存在し、折戸53号窯期を10世紀中頃から11世紀初頭とすれば、該期に当る遺跡は、横尾・山本畠・明星屋敷・蒲田・兵士山・新水・竹之城原・七本松・稻葉・乗落の10遺跡となり半数以上を占める。このことは灰釉陶器が山上に多く出土するということではなく、広汎に普及した時期に人々の山間への進出が最も積極的に行なわれたものと考えられ、律令制が崩壊し荘園制に移行する時、東園の生産力が高まり灰釉陶器の需要が伸びたとされることと関係があろう。⁽⁵⁵⁾平安時代の末、12世紀前半には里宮・御所平の2遺跡が存在する。

入間田宣夫氏（1976）によると、9—10世紀は撰闇政治にいたる準備期間、古代村落の崩壊が進行するなかで中世村落形成の条件がしだいにかたちづくられる先行期としてとらえることができ、10世紀中葉は律令行政村落支配の最終的崩壊期であるとされており中世村落形成が次第に形づくられる時代に当っている。さらに入間田氏は、その中で非農業民集団（鎌物師、檜物師などの手工業者）との不断の接触なしに中世の農業村落が再生産を維持することはできなかったとしこれらの社会的分業の展開なしに中世村落の形成はありえなかつてあろうとしている。⁽⁵⁶⁾このようないくべき必要があろう。

では、これらの山地・高地集落の性格・生業についてであるが、桐原氏が述べているようにマタギ・手工業者（鎌物師・木地屋など）の存在は当然考えられる。しかし、さらに多角的方面から見ることもできると考える。

非農業民集団として池尻遺跡の鍛冶址、七本松遺跡の工作址などの手工業者集団（鎌物師・木地屋・杣人・檜物師・鍛冶など）の生活址、位沢遺跡のような大野牧の放牧場と関係した牧場的

性格をもった遺跡、また、里宮遺跡は御岳信仰との関連を扱っており山岳宗教関係の遺構も存在したと考えられる。さらに、非農業民集団と解してよいか疑問であるが、横尾遺跡はしばらく登ると信州峠があり、Ⅲ章でも述べられているように昔から甲斐と佐久を結ぶ重要な交通路であり、峠に關係した遺構と考える。他に山本畠・兵士山遺跡も同様な遺跡と考えられており、峠及び交通路に關係した遺跡は数多いと思われる。その他に狩獵關係の遺跡も当然考えられるが、高地遺跡の割合を算出した時、弥生・古墳時代を通じて最低6%は高地に生活している人々がおり、これらの人々を考慮する必要があろう。

上述の非農業民集団の生活址は、桐原氏が述べているように一定期間（その期間は長くない）住んで去って行く性格をもっていたものが多いと考えられるが、一方、それらばかりではなく住居址の規模が大型でカマドもしっかりしたものを作っている住居址が存在することから、長期間にわたり定住した人々もいたと考えられ、能登健氏（1983）が述べているように「畑作を基調として、狩獵や山仕事に従事するという一つの生活様式」の農業民集団の山への積極的な進出・開拓も考えられる。

これらのことから平安時代の山地・高地集落については多方面からの研究が必要と考える。

尚、山村の成立期について落人伝説がある川上村は興味深く、さらに村内に存在する同時期の兵部・切草遺跡などから平安時代後半まで遡ると考えるのは飛躍であろうか。（高村博文）

註1 焼失住居址の基準としては、焼土・炭化材よりは、カヤを主体とした解体炭化物の存在が火災住居址としての必須の条件と考えられ、床面上覆土の炭化粒の頻度の考慮によるべきとの考えもあるが、本報告では特に基準を設けず、報告書の記載に従う。

註2 佐久市教育委員会（1976）『市道』

註3 佐久市教育委員会（1978）『跡部町田』

註4 佐久市教育委員会（1981）『下小平遺跡』

註5 小諸市教育委員会（1981）『五ヶ城』

註6 白田町教育委員会（1980）『井上遺跡』

註7 望月町教育委員会（1981）『新水』

註8 昭和58年度発掘調査により検出されている。竹之城原遺跡については福島邦男氏の御教示による。

註9 小諸市教育委員会（1983）『曾根城遺跡』

註10 佐久市で北近津4棟・三塚三塚2棟・上桜井北9棟・下小平1棟・三塚町田1棟・跡部町田5棟・市道7棟・舞台場10棟、小諸市で開口B3棟・宮ノ北2棟・五ヶ城3棟・曾根城1棟、白田町で井上3棟の51棟報告されている。

註11 清水田遺跡の3棟と中道遺跡の1棟は、報告書が未完のため除いてある。

註12 佐久市で上桜井北8棟・三塚鶴田4棟・戸板4棟・周防畠A4棟・儘田4棟・三塚三塚1棟、

今井西原3棟・蛇塚B5棟・舞台場20棟の53棟。小諸市で宮ノ北6棟・間口B3棟・五ヶ城11棟・曾根城6棟の26棟。望月町で犬飼3棟・新水5棟・又久保1棟・金塚3棟の12棟。川上村の本遺跡を加えて合計92棟報告されている。

- 註13 比較的良好な状態で検出された例は、跡部町田H1号住・下小平H1号住・清水田H2号住・五ヶ城第7号住・新水A第1号住がある。
- 註14 痛沢平治氏の御教示による。
- 註15 五ヶ城第7・14号住では梁、棟、桁材の一部と思われる炭化材が検出されている。
- 註16 屋根の構造は秋田県盛岡市小谷地遺跡埋没家屋第二家屋に類似しているように思われる。永井規男(1975)「秋田の埋没家屋」「家」社会思想社
- 註17 註2に同じ。
- 註18 平井聖(1975)「床の構造よりみた古代の住居」「家」社会思想社
- 註19 高橋光男・熊野正也(1983)「板床存在の疑いがある堅穴住居について」「史館第14号」市川ジャーナル社
- 註20 佐久市教育委員会(1978)『上桜井北』
- 註21 小諸市教育委員会(1981)『宮ノ北』
- 註22 小諸市教育委員会(1980)『間口B』
- 註23 真間期の住居址については、近年、該期の報告例が知られるようになり、佐久市の舞台場遺跡9棟、小諸市の宮ノ北遺跡1棟、曾根城遺跡6棟と計16棟報告されている。
- 註24 佐久市教育委員会(1980)『周防畠遺跡』
- 註25 佐久市教育委員会(1972)『北近津・戸坂』
- 註26 佐久市教育委員会(1983)『舞台場』
- 註27 望月町教育委員会(1982)『金塚遺跡』
- 註28 佐久市教育委員会(1980)『蛇塚B』
- 註29 丸山日出夫(1981)「長野県頭殿沢遺跡における堅穴状遺構(1)」「日本建築学会北陸支部研究報告集第24号」
- 註30 佐久市教育委員会(1976)『三塚鶴田』
- 註31 上桜井北H2・11・13・15号住、三塚鶴田H4号住、戸坂H1号住、篠田H1・2・3号住、三塚三塚H2号住、今井西原H4・5号住、舞台場H14号住、宮ノ北第9号住、五ヶ城第2・3・4号住の17棟。
- 註32 資料数が55と少ないため早急な判断はできないが第17図から便宜的に下記の分類を使用する。

	(最低辺長)	(最大辺長)
小型住居址	210~265 cm	258~312 cm
中型住居址	250~400 cm	308~490 cm
大型住居址	410~540 cm	460~559 cm
超大型住居址	600 cm 以上	600 cm 以上

- 註33 笹森健一氏がいわれているような「頂点にある樫木1本で垂木を支えた場合、主柱が必要と

- なり、いわゆる無柱穴の住居となる可能性がある」上屋構造の考え方もできる。
- 上福岡市教育委員会（1981）『埼玉県上福岡市内遺跡群埋蔵文化財の調査（Ⅲ）』
- 註34 永峯光一・鈴木孝志（1957）『長野県埴科郡松代町西条地区入組稻葉遺跡調査概報』
『信濃9-4』
- 註35 桐原健（1968）『平安期に見られる山地居住民の遺跡』『信濃20-4』
- 註36 田中啓爾（1930）『中央日本に於ける高地の人文地誌学的研究概報』『地理学評論第6卷8号』
に書かれているが、大正9年野辺山板機ザッコ沢の1,320mの高地において井出沢伊助氏が水田を作ったとされており、現在は行なわれていないが川上村においても1,300m以上の高地に水田が作られていたとされる特殊例はある。
- 註37 信濃史料刊行会（1954）『信濃史料第5巻』
- 註38 佐久平における古墳の墓造は、土塁長久氏も述べているように「水稻農耕による経済力の充実、蓄積なくしては考えられない」土屋長久（1970）『信州佐久平の後期古墳群について』『信濃22-5』とされており、佐久地方の最高地の古墳は、小諸市諸甲の天池（一杯水）1・2号墳（標高940～960m）であるが、これは生活址を見下ろす所に構築されたものと考えられ水稻耕作の高距的限界とは直接関係ないものと考える。また、南限とは佐久地方において南に下るほど秩父山系及び八ヶ岳山麓に近くなり標高が高くなるため水稻耕作の限界がどこまでできるかの目安となる。
- 註39 この場合高地性遺跡という名称が古くから使われているが、瀬戸内地方の比高差の高い遠路の名称と混同しやすいため高地遺跡とした。また、従来の高地性遺跡の名称は、各時代にわたって使用されていたがこの基準はあくまでも稻作の高距的限界で定義したものであるから、その意味で弥生時代以降を主に適用してゆきたい。
- 註40 文化庁文化財保護部（1983）『全国遺跡地図—長野県—』文化庁
- 註41 長野県（1981）『長野県史考古資料編全1巻（1）遺跡地名表』長野県史刊行会
- 註42 奈良時代の遺跡については、近年知られるようになってきたが、まだその数は多くなく統計処理の意味がないため省く。
- 註43 高地遺跡と遺跡数の算出資料が同一でないため正確な数字ではないが、一応の目安として統計処理を行なった。
- 註44 山地とは、山口源吾氏（1974）が『高距限界集落』の中で「一応、標高400m以上で山棱とこれに隣る谷底との標高差が100m以上の所とする」と定義しているが、その文意がよくのみこめないため、便宜的に標高400m以上で広い沖積地から離れた山中に存在する集落を山地集落とし、今後検討したい。
- 註45 長野県（1982）『長野県史考古資料編全1巻（2）主要遺跡—北・東信一』長野県史刊行会
- 註46 塩尻市教育委員会（1980）『中島遺跡』
- 註47 中山吉秀（1976）『離れ国分考』『古代61』の中にある離れ国分遺跡一覧表による各遺跡の標高は400m以上を有するものは1ヶ所しかなく長野県で検出される小規模な山地・高地集落にそのままあてはめることはできない。

- 註48 位沢、横尾、山本畑2号住、熊倉1～6号住、里宮、兵士山、井堀、新水A1～4号住、同B1号住、沖ノ沢、竹之城原、七本松3号住、八丁原、池尻、稻葉5号住の23棟でこのうち熊倉遺跡についてはカマドの詳細な報告はないもののかなり大型の石組カマドが5棟あると報じられている。
- 註49 大場磐雄（1954）「灰釉陶器の諸問題」「地方研究論叢」
- 註50 信濃史料刊行会（1956）『信濃史料第1巻考古篇上』
- 註51 楠崎彰一（1968）「瓷器の道（1）」「名古屋大学文学部二十周年記念論集」
- 註52 林和男氏（1977）が『菅平高原山本畑遺跡』の中で「上小地方のこの時期のすべての集落址から灰釉陶器が出土しているといつても過言ではない」としている。
- 註53 宮下健司氏の御教示による。
- 註54 赤羽一郎氏の御教示による。
- 註55 註51に同じ。
- 註56 註54に同じ。
- 註57 入間田寅夫（1976）「平安時代の村落と民衆の運動」「日本歴史4古代4」岩波書店
- 註58 能登健（1983）「熊倉遺跡の再調査」「群馬文化193」

4 御所平の流入伝説と地名

はじめ、Ⅲ章2歴史的環境の中で、横尾遺跡に近い信州峠や、小尾道について甲州側には口碑伝説が多いが、信州側には皆無だと書いておいた。ところが、小尾道と直接関係の有無は別として、御所平に古くから流入伝説があるので記しておく。

小尾道は信州往還とも呼ばれ、御所平はその重要な宿駅に当り、ここを基点として十文字・十石・碓氷峠等への通行が想定されていた。そして黒森から12キロといわれる道路は、峠の手前から黒沢川の流路に沿ってその両岸に拓かれて御所平に到着している。御所平は確かに甲州側の古文書に多く出てくるように、小尾道を中心に重要な宿駅であり、通路の横尾山は、古くから牧場として、また、木材や桶子材の採取場として御所平にとって関係の深い土地であった。

12世紀の中頃、保元の乱に破れた崇徳上皇は、讃岐に流罪されたが皇子重仁親王の行方については流罪とも戦死とも知られていない。その重仁親王が、僅かの主従で落ちのびて住まわせられた土地が、この御所平という地名の発祥であると伝えられる。同じ筋の伝説が、隣り合わせの北相木と南相木の両村に伝えられていて、北相木より南相木へ、更に峠を越えて御所平に移されたという。親王が越えて来たという峠を臨幸峠と呼んでいる。親王峠の嶺で、はるばる都の空を顧みて感懐を込めた歌を、

うちびさす都をいでて千曲川かみつせ遠くわれはきにけり
と詠ませられた。

戦時中佐久に疎開されていた、佐藤春夫先生は重仁親王の事蹟を尋ねて、幾度も川上村に足を運んでいるが、先生の小説『佐久の内裏』の中でこの歌について、格調の高い貴人の歌であると激賞している。

保元の乱には佐久の武士も多く参戦し、御所平の地名も出ているという。重仁親王は再起の夢もはかなく此地に登場され、内裏山の麓に葬り、幾歳月を経て後、弘治元年（1555）に至り栄上に一字を建て、天児屋根の命、応神天皇の二神を鎮め御靈宮または御陵社として祭った。ところが元禄年中内裏山の山火事で類焼し宮殿、宝物等が焼失し、再建の後再び元治元年（1864）の大暴風で社木と共に社屋も倒壊した。なお古記録については、明治の中頃、丸山某という地方の歴史家に調査研究を依頼したまま死去され、行方不明になったと伝えられている。

御靈宮は寛永6年（1629）の幕府検地では、高七斗五升除地になっている。当時は、十数名の社地作人が有り棟札に残っているが、維新の改革で上地され、現在は僅かの山林と昭和の初め建築された木造神明造りの社が残されているのみである。

御所平には、この伝説に由来するという地名が多く残されている。村名の御所平・本郷・内裏山・じんでぐち・大かいと・馬場平・結堀・大門先・鹿揚場・鷹放・天主の台・兵部・天神林などこれらは「南佐久郡古城址調査」に取りあげられた地名で、同書には「相当の地位があり、勢力のあった豪族が居住し、御所平は深い関係があったであろう」と書いてある。

この他にも中世以来の古い小字名が幾つもあるように思われるが、もっと重要なことは古文書にも、小字名にも書かれなかった地名というものが調べてみると沢山あるのではないかということである。筋違いかも知れないが、そういう地名を少し詮索すると大かいとの中に“なかごや”とよばれる場所があり、“かなやま”という場所にはかつて“かなやまきま”的祠が祭ってあった。向い合う山を“かじやばやし”と呼んでいるのも無関係ではない。「南佐久郡古城址調査」で詮索しあぐんで、伝説の古城址という位置を想定したのだが、実際には見当はずれの場所に“しろした”という地名が伝えられて、千曲川を隔て大門先に対している。

以上その他にもまだまだ有ると思うのだが、肝心なことは是等の地名は、既に文書からも大方の人々からも忘れられて、僅かにそこの土地の幾人かの耕作者によって伝えられ消え去る寸前にあつたものであることを知っていただきたい。

（由井茂也）

参考文献

- 藤田佳久（1981）『日本の山村』地人書房
- 森嶋 稔（1983）「弥生以降の高地性遺跡アラカルト」『しなのろじい』200号
- 小野武夫（1936）『日本村落史概説』岩波書店
- 竹田 且（1967）『日本の家と村』岩崎美術社
- 井上銳夫（1981）『山の民・川の民』平凡社
- 宮本常一（1964）『山に生きる人々』未来社
- 宮本常一（1966）『村のなりたち』未来社
- 橋口定志（1978）『暇廬の宿小考』『貝塚18』
- 井上修次（1934）「本邦最高地域の居住状態と居住上限界の分布について（I）・（II）」
『地理学評論』第10卷8・9号
- 塙尻市教育委員会（1982）『男屋敷遺跡発掘調査報告書』
- 能登志雄（1952）『聚落の地理』古今書院
- 網野善彦（1975）「中世初期における鎌物師の存在形態」『名古屋大学日本史論集』
- 戸田芳実（1967）「山野の貴族的領有と中世初期の村落」『日本領主制成立史の研究』
- 甲斐国誌編纂委員会（1971）『甲斐国誌』
- 信濃教育会南佐久部会（1935）『南佐久郡古城址調査』
- 一志茂樹・小穴芳実（1976）『乗鞍の自然と文化』長野県



1. 横尾遺跡遠景（北方より）



2. 遺跡からの遠景（東方を望む）

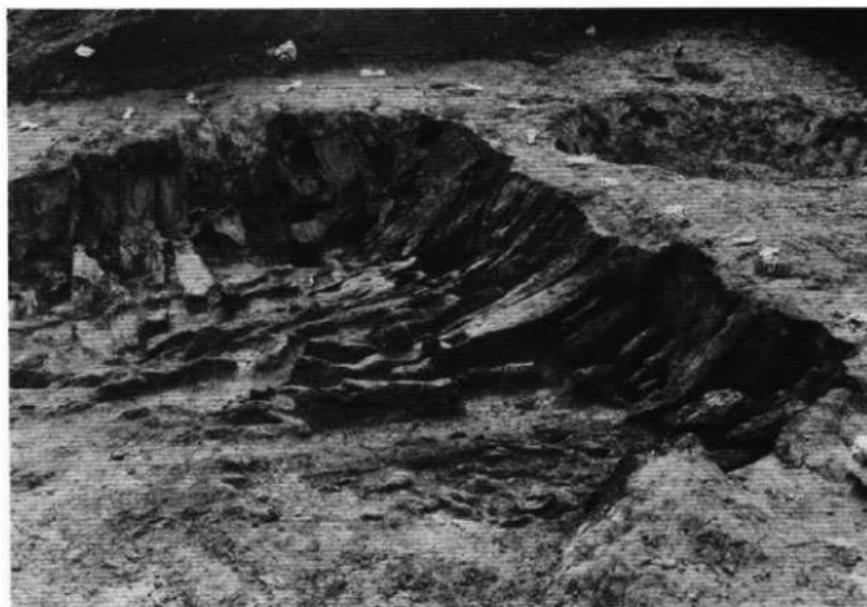


3. 遺跡近景（北東より）



4. 遺跡全景（北方より）

図版二 炭化材



1. 炭化材全景（東南より）



2. 北壁から弯曲して落ち込んでいる炭化材



1. 床材（南より）



2. H1号住居址カマド



3. カヤ状炭化物



4. 炭化材全景（西方から）

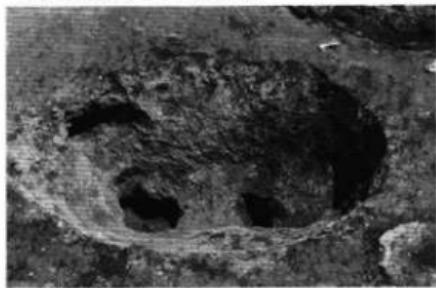
図版四
遺構・スナップ・H1号住居址出土土器



1. H1号住居址（南方より）



2. H1号住居址（西方より）



3. D1号土壤



4. 集石遺構



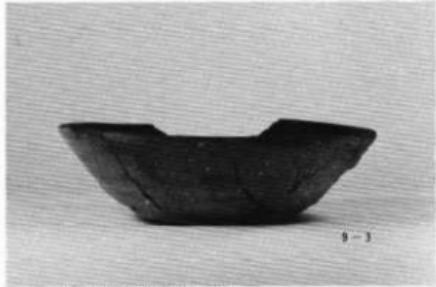
5. スナップ



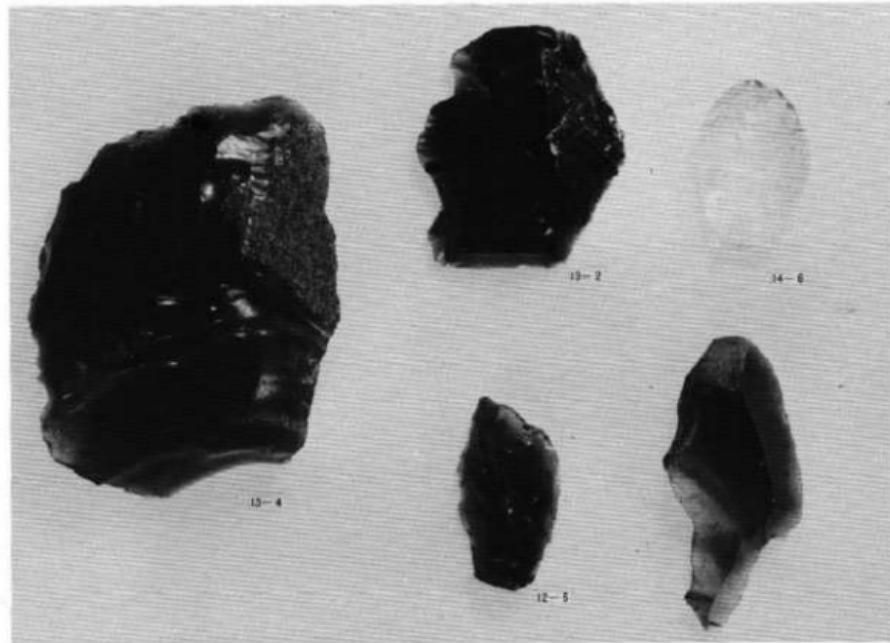
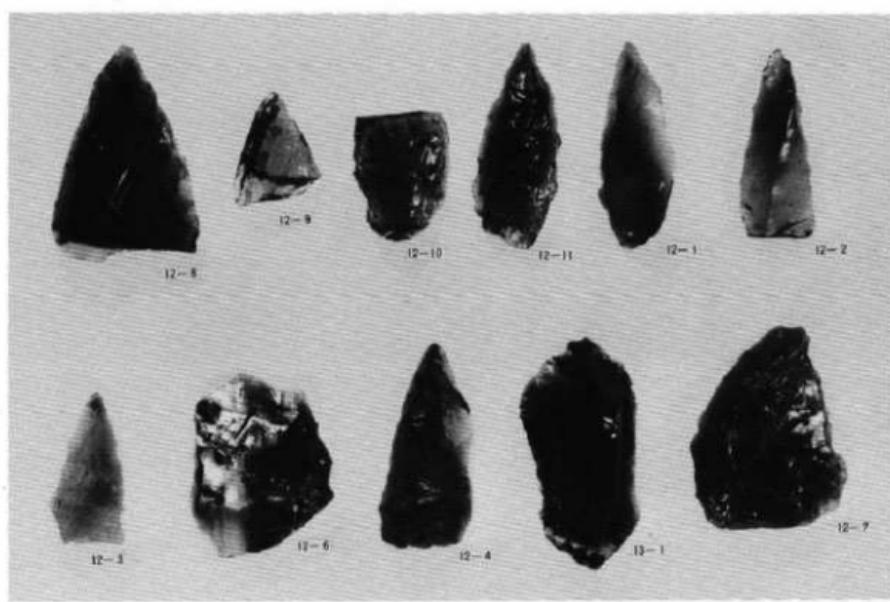
6. スナップ



7. H1号住居址出土土器



8. H1号住居址出土土器



図版六 遺跡周辺の既出資料



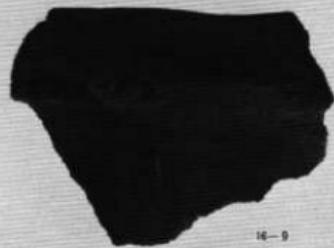
15-4



15-5



16-1



16-9



16-3



16-10

長野県南佐久郡川上村横尾遺跡

昭和58年11月1日発行

編集者 佐久考古学会

発行者 川上村教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社



